

の事物の本質的變化を指す。「跳躍」といひ、「連続における斷絶」といふも、また同じ事柄を指すのである。私はこゝにその説明として、エンゲルスが自然現象について言つた言葉を、次ぎに引用しておかう。

「如何に徐々に行はれるとも、一の運動形態から他の運動形態への推移は、常に依然として一の跳躍であり、一の決定的な轉換である。例へば、天體の機械學から・個々の天體の上におけるより小なる物體の機械學への・推移が、さうであり、また物體の機械學から・分子の機械學——吾々が謂はゆる物理學において研究するところの諸運動、すなはち熱、光、電氣、磁氣を包含せるもの——への・推移が、同様にさうである。同様にまた、分子の物理學から・原子の物理學——化學——への・推移も、一の決定的な跳躍によつて行はれ、特に通常の化學的作用から・吾々が生命と名づける蛋白質の化學的作用への・推移に至つては、尙更のことである。」（『反デュリンダ論』、ドイツ本、五七頁。河野・林兩氏譯本、八九—九〇頁。）

以上吾々は發展に關する二様の見解を述べたが、そのうち辯證法が立脚するところの第二の見地のもとにあつては、すでに所々で示唆した如く、發展は「對立物の闘争」の過程として現はれる。何故なれば、かゝる見地のもとにあつては、統一的なものが矛盾に充ちたその構成分に分解され、そして斯かる構成分の間における矛盾によつてのみ、當該事物の運動（變化、發展、進化）が説明されるのであるから。

例へば、これを人間社會の進化について言ふならば、吾々が次ぎの章において悉しく見るであらうやうに、辯證法は、かゝる進化の動因を、一定の生産諸關係と生産諸力との矛盾撞着のうちに見出す。一定の生産諸關係は、それが社會の生産諸力の發展を助長するものとして役立ちつゝある限りにおいては、それ自身が一つの生産力である。すなはち、かゝる條件のもとにおいては、生産諸關係は生産諸力と同一である。だが、一定の生産諸關係のもので、社會の生産諸力が或る程度以上の發展段階に達すると、従來は生産諸力の發展に貢献してゐた生産諸關係が、逆に生産諸力のより以上の發展を阻害する程に轉化する。かくなるときは、問題の生産諸關係は、嘗ては一つの生産力であつたけれども、今はその反對物たる破壊力に轉化するのである。かくて生産諸力と生産諸關係との間に矛盾撞着が起り、そしてそれらの矛盾撞着が、古き生産諸關係の廢滅と・新たなより高度の生産諸關係による之が代位とを、不可避的なものたらしめるのである。なほ以上の如き生産諸關係と生産諸力との間における矛盾は、社會の表面においては、一の階級と他の階級との間における闘争となつて現はれる。だから「すべて従來の歴史は階級闘争の歴史である」とも言ふのである。現代社會にあつては、それはブルジョアジーとプロレタリアートの間における闘争となつて現はれる。そして斯かる闘争のみが、現代社會をより高度の組織へ前進せしめるための根本的な動力である。ブルジョアジーとプロレタリアートとは現代社會を構成してゐる對立物である。かゝる對立物の闘争のうち現代社會を改造する



に至る動力を見出すといふことは、現代社會の進化を一の「自己運動」として認識するといふことである。プロレタリアトをたゞ同情に値する弱者とのみ見來つた從來の空想的社會主義者と異なり、マルクスがこのプロレタリアトの肩上に社會改造の歴史的使命が負擔されてをり、プロレタリアトこそが社會改造の原動力となるべきものであることを、發見したのは、周知の如く實にマルクスの偉大なる功績であるが、かゝる發見は、以上述べ來つたところによつて明かなる如く、マルクスがその科學的研究の方法として採用した辯證法的唯物論の賜物に外ならぬのである。

レーニンは、この點につき、「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分」と題する論文の中で、次ぎの如く述べてゐる。社會の發展を「自己運動」として把握せるマルクス主義の特徴が、そこには最もよく描き出されてゐると信するので、私は若干の重複を厭はず、やゝ長きにわたつてその一節を引用しておく。

「農奴制度が顛覆され、この神聖なる世界に「自由なる」資本主義社會が現はれるや否や、この自由なるものは、勞役人民の抑壓と搾取との一の新らしき方式にすぎぬことが暴露された。種々の社會主義的學説は、この抑壓の反映として、またそれに對する抗議として、直ちに發生した。だが最初の社會主義は空想的社會主義であつた。それは資本主義社會を批評し、非難し、呪詛し、その廢絶について空想し、より善き組織について幻想し、富者に搾取の不正なることを説教した。しかし空想的社會主義は、眞の活路を指示することができなかつた。それは資本主義の下におけ

る賃銀奴隸制度の本質を説明することもできなければ、資本主義の發展の法則を發見することも、新らしき社會の創造者たりうべき社會的勢力、「すなはち「自己運動」の根本的動因——河上補」を見出すこともできなかつた。

「そのうちに、ヨーロッパの到るところにおける・殊にフランスにおける・封建制度農奴制度の崩壞を伴つたところの狂猛な革命は、諸階級の鬭争（すなはち對立物の鬭争——河上補）が、あらゆる發展の基礎であり、その原動力であることを、益々明かにした。

「農奴所有階級に對する如何なる政治的自由の勝利も、絶望的な抵抗なくしては獲得されなかつた。如何なる資本主義國家も、資本主義社會の階級の間における生死の鬭争なくしては、多かれ少かれ自由な・民主主義的な・基礎の上に立つことはできなかつた。

「マルクスの天才は、誰よりも先きに、世界歴史の教へるところの結論を、こゝから導き出し、これを徹底せしめたところにある。その結論とは階級鬭争の學説（すなはち發展は對立物の鬭争であるとの見解を人間社會に具體化せしめたもの——河上補）である。

「人々が耳觸りのよい道德的・宗教的・政治的・社會的の文句や宣言や約束やの背後に、どの階級の利害を發見することを學ばないかぎり、彼等は政治における欺瞞および自己瞞着の愚劣なる犠牲となつてきたし、また常になるであらう。また改良および改善に與みする人々は、一切の古き制度は如何に野蠻で腐敗してゐるやうに見えても、それは何れかの支配階級の力によつて支



持されてゐることを、彼等が理解しないかぎり、古き制度の擁護者によつて愚弄されるであらう。しかし斯かる支配階級の抵抗を粉碎するためにはたゞ一つの（レーニン傍點）手段があるのみ。「發展を對立物の鬭争となす吾々の見地からは、實際のところ「たゞ一つの手段があるのみ」である——河上補」。古き制度を一掃して新らしき制度を打建てる能力のある勢力を形成しうる——そしてそれ自身の社會的地位によつて當然かゝる勢力を形成すべき——勢力をば、吾々を圍繞する社會自體のうちに見出し、「社會發展の原動力を當該社會自體のうちに見出すことが、社會の發展を一の「自己運動」として・一の「自發的發展」として・他に依存せざるものとして・把握するための根本條件である。——河上補」これを鬭争のために啓蒙し組織することである。

「たゞマルクスの哲學的唯物論〔辯證法的唯物論〕のみが、今日までの總ての被抑壓階級がそのうちに呻吟し來つたところの・精神的奴隷からの活路を、プロレタリアートに指示した。たゞマルクスの經濟理論のみが、全資本主義制度のうちにおけるプロレタリアートの眞實の地位を〔その歴史的使命を——河上補〕説明した。」（瓜生・直井兩氏譯「マルクス・エンゲルス・マルクス主義」八〇—八二頁）

#### その四 量から質への轉化

量から質への轉化（ならびに質から量への轉化）の問題と、否定の否定の問題とは、エンゲルスが

「反デューリング論」の第一篇の第十二章「辯證法、量と質」および、第十三章「辯證法、否定の否定」において、詳細に論述してゐるところである。こゝでは以上述べ來つた諸問題との連絡に注意しつゝ、先づ量から質への轉化について述べよう。

量から質への轉化といふのは、單なる分量上の變化が品質上の變化を齎らすことを意味するのである。それについては、吾々はすでに反對物への轉化を説明した條下で、煙草、食物、藥劑、等々の事例を擧げた際、すでに何程か觸れたところである。例へば藥物は、吾々の健康を維持するために役立つといふ點において、有用物であるに相違ないが、しかし一時に服用する分量が或る一定の程度を超過すると、それは忽ち毒物となり、往々にして人命を奪ふものとなる。すなはち、たゞこれを服用する分量を増加しただけで、藥物はその反對の毒物になり、有用物はその反對の有害物になる。此の如きが謂はゆる量から質への轉化なるものであるが、それは取り立てゝ言ふまでもなく、先きに第二項において説明したところの「反對物への轉化」の一つの場合に屬するのである。

私は次にエンゲルスの擧げてゐる二三の事例を、先づ引用しよう。

最もよく一般に知られてゐる事例の一つは、水の凝集状態の變化である。それは通常の氣壓のもとでは、攝氏零度で液體から固體になり、攝氏百度で液體から氣體になる。即ち、これら二個の轉換點においては、氣溫の單なる量的變化が、水の質的變化を惹き起すのである。詳しくいへば、攝氏零度以下の氣溫では、水は氷といふ形態で固體になつてゐる。だが、段々溫度を高めて行き、遂に零度と



いふ境を越す點に達すると、氷は溶解して水になる。更らにその水に段々熱を加へて或る程度以上に達すると、例へば炭火の上に置かれた鐵瓶の湯のやうに、それは平靜な状態を失つて沸騰状態を示すやうになる。すなはち、水の存在状態の上には徐々に或る變化が起る。だが、かゝる若干の變化があるにも拘はらず、攝氏百度までの熱を受けない部分の水は、依然として液體といふ形態に止まると同時に、それは百度といふ境を轉換點として忽ち氣體に變化する。

エンゲルスは更に炭素結合物の例を擧げてゐる。次ぎにその部分を抄録しておかう。『反デュリング論』、ドイツ本、一二八頁以下。河野・林兩氏譯本、一九九頁以下。次ぎに掲ぐるところは、一二個所以外すべてこの譯本のまゝである。』

『例へば吾々が、化學においてやるやうに、一原子量の炭素をCによつて、一原子量の水素をHによつて、一原子量の酸素をOによつて表はし、各結合に含まれてゐる炭素の原子量の數をnで表はすとすれば、炭素結合物の系列の或るものに對する分子式は、次ぎの如く表はすことが出来る。

- $C_n H_{2n+2}$  —— 通常のパラフィン系列
- $C_n H_{2n+2}O$  —— 第一アルコールの系列
- $C_n H_{2n}O_2$  —— 一鹽基性のオレイン酸の系列

『今吾々が一例として以上のうち最後の系列を取り、そして順次に  $CO_1$   $CO_2$   $CO_3$   $CO_4$  等々と置いてゆくならば、吾々は次ぎの如き結果を得る。(同分異性のものは除く)。

|                |           |         |        |
|----------------|-----------|---------|--------|
| $CH_2O_2$      | —— 炭酸     | 沸騰點100. | 融解點 1. |
| $C_2H_4O_2$    | —— 酢酸     | ◇ 118.  | ◇ 17.  |
| $C_3H_6O_2$    | —— プロピオン酸 | ◇ 140.  | ◇ —    |
| $C_4H_8O_2$    | —— 酪酸     | ◇ 162.  | ◇ —    |
| $C_5H_{10}O_2$ | —— ペンタン酸  | ◇ 175.  | ◇ —    |

これをすつと續けてゆくと、遂に  $C_{20}H_{40}O_2$  のメリシン酸になる。これは攝氏八十度で始めて融解するがしかし、一般に氣化する場合には必ず分解するので、沸騰點を有しない。

『かくて吾々はこゝに、元素の單なる量的増加・しかも常に同一の割合における増加・によつて生ずるところの、質的に異なる諸個體の全系列を見る。此の如き現象は、正常的なパラフィン  $C_n H_{2n+2}$  における如く、結合される總ての元素が同じ割合でその量を變化する場合に、最も純粹に現はれる。この場合は、最も低いのはメタン  $CH_4$  で、これはガスであり、知られてゐる最高のもはヘクデカン  $C_{16}H_{34}$  で、これは無色の結晶した個體であり、二十一度で融解し、二百七十八度で蒸發する。以上二つの連鎖において、新しい環は何れも、 $CH_2$  の添加によつて・すなはち前の環の分子式に一原子量の炭素と二原子量の水素との添加によつて・生ずるのであり、分子式における斯かる量的變化が常に異なる諸個體を生ぜしめるのである。』

更にエンゲルスは、『吾々は最後に量より質への變化の今一人の證人呼び出さう』と言つて、ナボ



レオンを引き合ひに出してゐる。それによると、フランスの騎兵は、乗馬が下手であるけれども、訓練が行き届いてゐる。これに反し、マメルク人は、一騎打ちには比類なき優秀の騎士であるが、しかし軍隊としての訓練を缺いてゐる。そしてナポレオンの言ふところによれば、「二人のマメルク人は三人のフランス人より絶対に優れてゐる、百人のマメルク人は百人のフランス人と丁度匹敵する。三百人のフランス人は三百人のマメルク人より通常優れてをり、千人のフランス人は常に千五百人のマメルク人を破る。」かくて数の少い場合にはマメルク人に比較して弱いフランスの騎兵が、人数を増すと（すなはち量的増加をなすと）マメルク人よりも強いものとなり、その質を變化するのである。

なほエンゲルスが注意してゐる如く、マルクスは『資本論』のなかで、經濟現象の上に起る量から質への轉化を、種々の個所において指摘してゐる。私はその一例として先づ協業から生ずる利益の一二について述べよう。多數の労働者がその力を集めるときは、個々の力の合計とは違つた一つの新たな力が生まれる『全體はその部分の合計に等しいといふ數學者の命題は、それを吾々の研究對象に應用するとき、もはや正當でなくなる。』例へば、十人の労働者が別々に働いたのでは到底動かすことのできない大きな石でも、その十人がもし力を協はしたならば、これを動かさうる場合がある。『結合された労働の働きは、離れ／＼の労働によつては、全くなし遂げえられないか、または遙に長い時間においてのみ・あるひは極めて僅かな程度においてのみ・なし遂げえられるに止まる。』かゝる場合は、

協業によつて個々の労働者の生産力が高められるといふよりも、むしろ個人の手をば品質の異なる全く新たな生産力が創造されるのである。

右に述べた『多數の力を一個の集合力に融合することから生ずる新たな力能』の外に、多數の労働者が『單なる社會的接觸』をなすだけで、すなはちたゞ一つ場所へ集まつて労働するといふだけで、一種の競争心が起り元氣が高まる、そこで例へば『同數の労働者を、十人の農業經營者が各々三エーカーの土地の上に分割して使用する代りに、一人の農業經營者が一纏めにして三百エーカーの土地の上に使用する場合には、共同に働く労働者の數が増すといふことの他に、實際家でなければ到底辨別しえない一つの利益が存する。一と四との比は三と一二との比に等しいといふことは、自明のことのやうに見える。だがそれは實際には當てはまらぬ。』

私は更に、貨幣の資本への轉形につき、今一つの例を擧げておかう。（私は先きに反對物への轉化を説明せし際、『資本論』の中から、單なる商品生産の資本家的商品生産への轉化に關する一例を引用した。それはそこで附言しておいたやうに、量から質への轉化の一適例であるが、こゝでは重ねてそれに言及することを省略しておく。）『資本論第一卷第九章（カウツキー版、二五六―二五七頁）に説明してある次ぎの事實は、そこでマルクス自身が言つてゐるやうに、『單なる量的變化は、ある一定の點に達すると、質的變化に急變するといふ法則』——『ヘーゲルがその論理學のうちで發見したこの法則』——の正しいことを、確證するものである。私はその全文を引用しておかう。



「剰餘價値の生産に關する以上の觀察から明かなことであるが、任意の貨幣額または價値額がいつでも資本に轉形されうるといふわけではなく、むしろかゝる轉形の行はれるためには、一定の最小限度の貨幣または交換價値が個々の貨幣所有者または商品所有者の手に存在してゐなければならぬのである。可變資本の最小限は、剰餘價値獲得のために一年中毎日使用される個々の労働力の費用價格である。もしもこの労働者が彼れ自身の生産手段を有つてをり、しかも彼れが労働者として生活することに甘んじてをるものとすれば、彼れにとつては、彼れの生活資料を再生産するために必要な労働時間——例へば毎日八時間——だけで充分であらう。従つて彼れはまたたゞ八時間の生産手段を必要とするにすぎぬであらう。これに反して、この八時間以外に例へば四時間の剰餘労働を彼れに行はしめる資本家は、附加的生產手段を調達するために附加的貨幣額を必要とするであらう。ところが上述の假定の下においては、彼れは、毎日占有する剰餘價値によつて労働者の如く生活しうるためにすら、すなはち彼れの必要な諸欲望を充足しうるためにすら、すでに二人の労働者を使用せねばならないであらう。この場合には、彼れの生産の目的は、單なる生活の維持であつて、富の増殖ではないであらう。しかるに資本家的生産においては後者が前提されてゐるのである。そこで彼れは、普通の労働者より二倍よく生活し、且つ生産される剰餘價値の半分を資本に再轉形するためには、労働者數と同時に前貸資本の最小限をもまた、八倍に増加せねばならぬであらう。もちろん彼れ自身も、彼れの労働者と同様に、直接に生産過程にたづさはることが出来る。だがその場合には、彼れは、資本家と労働者と

の中間物たる「小親方」である。「資本家と労働者とは對立物である、しかしこれら對立物の境界は決して不動的な・凝固的な・截然たるものではない。そこには親方なる中間物が介在する。——河上補」資本家的生産がある一定の高度に達すると、資本家は、彼れが資本家として、すなはち人格化したる資本として、機能する時間全部を、他人の労働の占有と従つてその管理とのために、使用しえねばならぬ。中世の同業組合制度は、個々の親方が使用しうる労働者數の最大限を極めて小さく制限することにより、手工業の親方が資本家に轉形することを強制的に妨げようと試みた。貨幣所有者または商品所有者は、生産のために前貸される最小額が中世のこの最大限を遙かに越えるときのみ、はじめて現實に資本家に轉形するのである。單なる量的變化は、ある一定の點に達すると、質的差異に急變する、——ヘーゲルがその論理學のうちで發見したこの法則の正しいことは、自然科學におけると同様に、こゝでもまた確認されるのである。」

レーニンもまた種々の機會に、この量から質への轉化の法則を指摘してゐる。私はこゝに政治現象に關する一例として、「國家と（革命）」の中から、次ぎの一節を引用しておかう。彼れは、マルクスがその著「フランスの内亂」の中において、「バリー・コンミュンの經驗につき僅かではあつたけれども、最も精確な分析」をなしたことを引用した後、次ぎの如く言つてゐる。

「コムミュンによつて破壊された舊國家の諸機關は、外觀上では單に」より完全なデモクラシー



によつて——常備軍の廢止、すべての官吏に對する完全なる選舉權および罷免權によつて——置き換へられたかに見える。だが、この「單に」は、實際のところは、一つの制度に代ふるに原則的に他の性質をもつ制度をもつてする巨大なる更代を意味する。こゝにこそ「量から質への轉化」の一つの場合が認めらるべきである。此の如き考へえられる最大の完全さと徹底さとをもつて實現されたデモクラシーは、ブルジョアのデモクラシーからプロレタリア的デモクラシーへ。(一定の階級の「抑壓」のための特殊なる「權力」としての)國家から、もはや本來の國家ではないところの或るものへ・轉化するのである。』(一九二六年ベルリン版、四一頁。)

以上吾々は自然現象および社會現象について量から質への轉化を生ずる二三の實例を挙げたが、形而上學者の發展觀における主なる缺陷の一つは、此の如き轉化を到るところにおいて看過する點に横たはる。吾々は先きに、發展に關しては二つの基本的な見解があること、そしてそのうち「死んだ・貧しい・ひからびた」見解は「縮小および擴大としての・反覆としての・發展」の見解であること、等を述べたが、事物の發展をたゞ同一品質の反覆的連続と見るこの見解は、取りも直さず一定の事物の發展過程のうちに、單なる分量の増減のみ見て、その品質の變化を看過するものであり、しかるかぎりにおいて(すなはち分量の方面をのみ見てゐるといふ點において)その觀察は一面的である。しかるに辯證法は、事物に對する全面的觀察を要求する。そして斯かる要求の一つの現はれは、吾々が

一定の事物の變化を觀察する場合には、吾々はそのものの量の變化をのみ見るに止まらず、同時にその質の變化にも留意せねばならぬ、といふ要求となる。量から質への轉化の法則は、かくして發見されるのである。

なほこの量から質への轉化の法則は、如何に對立物が同一であるかを明白にする。すでに述べたやうに、全く同一の化學的藥品が、ある條件のものでは(すなはち服用の分量が適度であつた場合には)有用物となり、ある他の條件のもとでは(すなはち服用の分量が適度な程度を超過した場合には)明かに有害な毒物となる。この場合、藥品としての有用物と、毒藥としての有害物とは、明かに對立物であるが、しかもこれらの對立物は、實際においては同一の化學的藥品たるにすぎない。此の如きを對立物の同一性といふのである。

元來單なる分量上の變化が品質上の變化を齎らすといふことそれ自身が、品質的差異を有するものの品質的同一を意味してゐる。何故といふに、單なる分量上の變化とは、同一なる品質を有する事物の量的變化を意味するのであるが、しかもその單なる分量上の變化がある品質的差異を生むに至るものとするならば、それは畢竟、同一なる品質を有する事物が、或る條件のもとでは品質を異にする方面を有することになる、といふことを意味するに外ならぬからである。單なる貨幣と資本とは對立物である。しかし剩餘價值を生む貨幣は資本となるのであり、しかるかぎりにおいて貨幣と資本とは同一物である。



吾々はすでに、本章第四節において、一切の事物の差異は、すべて相對的であり條件づきである、ことを述べた。單なる分量上の變化が品質的變化を生ずるといふことは、取りも直さず事物の品質的差異なるものが相對的のものであり條件づきのものであることの一つの現はれである。

### その五 否定の否定

すでに指摘したやうに、『否定の否定』に關する問題は、エンゲルスが『反デューリング論』第一篇第十三章で詳論してゐるところである。こゝに否定の否定といふは、事物の辯證法的發展の過程において、例へばAの否定によつてBが生まれ、次ぎにはBの否定によつて再びAが生まれ、從つて或る方面から見れば、かかる否定の否定によつて最初の出發點への復歸（それが單なる復歸でないことは後に述べる）が行はれることを、意味するのである。私は具體的な例によつてそれを説明する前に、先づ何が故に否定の否定によつて此の如き一種の出發點への復歸が行はれるかの理由を述べよう。

すでに述べたやうに、事物はその發展過程において『反對物への轉化』をなす。だから、例へばAがその反對物たるBに轉化したとすると、そのBがそれ自身の發展過程において再びその反對物へ轉化するならば、それは最初の出發點たるAに復歸するといふことになる。

『資本論』においては、資本主義社會から共產主義社會への進展をもつて、『否定の否定』の一つの場合に屬するものとしてゐる。『資本論』第一卷第二十四章の有名なる最後の結びがそれである。私はその全文を次ぎに引用しておかう。

『資本の本源的蓄積は、すなはち資本の歴史的起源は、結局何に由來するか？ 曰く、それは奴隸および農奴の賃労働者への直接の轉化・すなはち單なる形態變化・にあらざるかぎり、それはたゞ、直接生産者に對する剝奪を・すなはち自己の労働に立脚する私有財産の崩壊を・意味するにすぎぬ。

『社會的・集会的・財産に對立するものとしての私有財産なるものは、労働手段およびその他の外界の労働條件物が私人に屬する場合にのみ成立する。しかるに、この私人が労働者であるか非労働者であるかに從つて、私有財産もまた異なつた性質をもつ。一見するとき、私有財産制は無限の相違を呈するが如くであるが、それらはたゞ此の兩極端の間に横たはる中間状態を示すにすぎざるものである。

『労働者がその生産手段に對して有してゐる私有財産は、小經營の基礎であり、またこの小經營なるものは、社會的生產の・ならびに労働者自身の自由なる個性の・發生のため、缺くべからざる條件である。もちろん此の如き生産の仕方は、奴隸制、農奴制、およびその他の隷屬關係の内部においても、存在してゐたものである。しかしながら、それが能く繁榮し、その全力を張り切り、それに相應した典型的の形態をとるに至つたのは、労働者が彼れ自ら使用する労働條件物の自由なる私有物たりし場合に、すなはち農民ならばその耕作しつゝある土地の私有者であり、手



工業者ならば彼れが熟技者として使用しつゝある器具の私有者である場合に、限られるのである。かゝる生産の仕方は、土地およびその他の生産手段の分散を前提とする。それは、これら生産手段の集積を排除すると同じやうに、また協業・同一過程の内部における分業・自然に對する社會的の支配および制御・社會的生產力の自由なる發展・を排除する。それはたゞ、生産および社會の・狹隘なる自然發生的の限界とのみ、兩立しうるに止まる。……それは、一定の高度に達すると、それ自身の、(破壊)のための物質的手段をこの世に齎らす。その瞬間以後、社會の母胎内には、その母胎のため束縛を感じざるをえざる諸々の力と情熱とが生動することになる。その母胎は破壊されねばならぬし、また破壊されてしまふ。かゝる母胎の破壊、個人的な分散的な生産手段が社會的に集積されたる生産手段へ轉化すること、従つて多數の者の微細な財産が少數者の巨大な財産に轉化すること、従つてまた多數の衆民に對する土地や生活資料や労働具やの剝奪、衆民に對するこの恐るべく且つ困難なる剝奪、此の如きが資本の前史を形成する。……かくて、自己の労働によつて得たる私有財産、言はゞ個々の獨立せる労働者とその労働條件物との融合に立脚せる私有財産は、他人の・しかし形式的には自由な・労働の搾取に立脚するところの、資本家的な私有財産により、驅逐されることとなつたものである。

「此の如き變革の過程が、深さにおいてまた廣さにおいて、舊社會を充分に分解し了はるや否や、労働者がプロレタリアに轉化されて彼等の労働條件物が資本に轉化されるに至るや否や、資本家

的な生産の仕方がそれ自身に立脚地を得るに至るや否や、労働のなほそれ以上の社會化、土地その他の生産手段の・社會的に利用される共同的な生産手段への・なほそれ以上の轉化、従つて私有財産の所有者に對するなほそれ以上の剝奪は、こゝに一つの新たな形態をとる。今や剝奪さるべきものは、もはや自營の労働者ではなくて、多數の労働者を搾取しつゝある資本家である。「かくて私有財産(剝奪)の過程は、それが充分の深さと廣さにおいて舊社會を分解し了はるや否や、言ひ換へれば、その量的發展が或る程度以上に達するや否や、それ自身において一の質的變化を起す。獨立労働者に對する剝奪は、變じて資本家に對する(剝奪)となる。——河上補」。

「かゝる剝奪は、資本家的生産それ自身の内在的法則的作用によつて・資本の集中によつて・行はれる。一の資本家は常に多數の資本家を打ち殺しつゝある。なほこの集中と共に、すなはち少數の資本家により多數の資本家に對して行はれる剝奪と共に、絶えず擴大する規模における労働過程の協業的形態、技術上における科學的意識的な應用、土地の計畫的な利用、労働手段のため共同的にのみ利用されうべき労働手段への轉化、結合的・社會的・労働の生産手段としてこれを使用することに基づく有らゆる生産手段の經濟的利用、すべての國民が世界市場の網に絡らまること、これに伴ふところの資本主義的制度の國際的性質が、手に手をとつて益々發展することになる。かゝる變革過程の一切の利益を横領し獨占するところの資本長者の數は絶えず減少すると共に、困窮・壓制・隸屬・墮落・搾取の量は益々増大ししかもまた、絶えず膨大するところの・且つ



資本家的生産過程それ自身の機構により訓練され結合され組織されるところの・労働者階級の反抗も益々増大する。かくて資本獨占は、嘗てそれと共にまたその下において花を開きたる・その生産の仕方に対する桎梏となる。生産手段の集中と労働の社會化とは、遂にその（資本家的）の外被と兩立しがたき一點に達する。その外被は（粉碎）される。資本家的私有財産の（吊鐘が鳴る。剝奪者が（剝奪）される。

「資本家的の生産の仕方から生まれ出た資本家の領有の仕方は、すなはち資本家的の私有財産は、個人的な・自己の労働に基づける・私有財産の第一否定である。だが資本家的生産は、自然過程の必然性をもつて、それ自身の否定を造りだす。それは否定の否定である。それは労働者の私有財産を再び恢復するものではないが、しかし資本主義時代の成果たる協業や、土地の・ならびに労働そのものによつて生産された生産手段の・共同所有やを、基礎とする個人的財産はこれを造りだす。」

自己の個人的労働に基づく私有財産の否定、これは第一の否定である。かゝる否定によつて、自己の労働に基づく私有財産は、その反對物に・他人の労働の搾取に基づく私有財産に・すなはち資本家的の私有財産に・轉化する。だが、かゝる資本家的の私有財産は、更に自己を否定することによつて、社會の共同財産に轉化する。これは否定の否定である。その結果、社會は「共同の生産手段をもつて労働し且つ彼等の個人的労働力を自ら意識しつゝ社會的労働力として支出するところの・自由人の組

合」すなはち共產主義的社會に轉化する。かゝる場合、「組合の全生産物は社會的生産物である。かゝる生産物の一部は再び生産手段として役立つ。この部分は社會的なものとして残る。だが他の部分は組合員の生活資料として消費される。だからそれは彼等の間に配分されねばならぬ。」（資本論」第一卷、カウツキー版、四二頁。）それは、かく配分されることによつて、各人の個人的財産となる。だから、否定の否定の結果は、最初に存在してゐたやうな自己の個人的労働に基づく・私有財産を、再び恢復するものではないが、しかし社會全員の共同労働と土地および生産手段の共同所有とを基礎とする・個人的財産をば、新たに造りだすのである。それは單に最初の出發點に立ち歸へるのではないが、以上の如き意味において、言はゞ最初の出發點に立ち歸るのである。

なほエンゲルスが「反デューリング論」で用ひた麥粒の例は、種々の著作に引用されてゐる。私もこゝにそれを引用しておかう。

「否定の否定は、甚だ簡単な・到るところ日々行はれてゐる・進行であり、もし吾々がそれを被ひ隠くしてゐる秘密箱を取り去るならば、それは如何なる子供でも理解しうるものである。一つの麥粒を例にとらう。かゝる麥粒の無数のものは、粉にひかれ、炊がれたり醸造されたりして、消費される。だが、一つの斯かる麥粒がそれにとつて正常的な諸條件を見出し、それが適當な土壌の上に落ちたならば、熱度と濕氣とのために、その上に特有な一變化が起る。それは發芽する。



麥粒は麥粒としては消滅する、それは否定される、それから發生した植物が——麥粒の否定が——取つて代はる。しからばこの植物の正常な生涯はどうであるか？ それは生長し、開花し、結實し、最後には再び澤山の麥粒を生産する、そしてこれらの麥粒が熟するや否や、莖は枯死し、その莖の方は否定される。かゝる否定の否定の結果として、吾々は再び最初の麥粒を得る、だが單一のものではなく、十倍、二十倍、三十倍の數を得る。穀物の種類は非常に緩漫に變化する、だから今日の麥粒は百年前のそれと依然として殆んど同じである。だが、もし吾々が變形し易き觀賞植物、例へばダリヤまたは蘭をとつて見るならば、吾々はかゝる否定の否定の結果として、たゞにより多くの種子を得るばかりでなく、より美しき花を開くべく改良されたる種子を得るのであり、かゝる過程の反覆毎に、新たな否定の否定毎に、かゝる完成は高まるのである。『反デューリング論』、ドイツ本、一三八頁。』

右の麥粒の場合には、否定の否定の結果として、『吾々は再び最初の麥粒を得る』のであり、しかるかぎりにおいては、吾々は最初の出発點に立ち歸るのである。だがこの場合にも、吾々はたゞ單に最初の出發點に立ち歸るのではない。少くとも量において、最初の一粒は十倍、二十倍、三十倍に増加してゐる。そのみでなく（尤も麥粒の場合には極めて微少な程度においてしか行はれないが）そこには何程かの程度において質の變化が行はれてゐる。すなはち事態は單なる循環をなしてゐるのではなく、螺旋形を描いて發展するのである。

エンゲルスは、かゝる否定の否定をもつて、『到るところ日々行はれてゐる進行』だとなしてゐる。しからば經濟現象について如何なる例があるか？ 先に掲げた私有財産に關する否定の否定は、日々繰り返へされてゐるわけではない。吾々はもつと日常的な・何回となく繰り返へされてゐる・現象を指摘しておかう。『資本論』において詳細に論究してあるやうに、資本の運動の最も一般的な形態は次ぎの如くである。

G' (貨幣) — W (商品) — G' (より多くの貨幣)

すなはち一定額の貨幣は商品に轉形し、しかる後再び貨幣に轉形する。この場合第一段の過程の（貨幣）——W（商品）は第一の否定である。これによつて、貨幣は自己を否定して、その對立物たる商品に轉形する。第二段の過程 W（商品）——G'（より多くの貨幣）は、否定の否定である。貨幣の否定たる商品は、そこでは自己を否定して、その對立物たる貨幣に轉形する。かくて吾々は、否定の否定の結果として、再び貨幣を得る。しかるかぎりにおいて、吾々は最初の出發點に立ち歸る。だが、この場合においても、吾々はたゞ單に最初の出發點に立ち歸るのではない。上記の如き運動が行はれた結果として、吾々はGの代りにG'を・すなはち最初の貨幣よりも多額な貨幣を・入手しうるのである。これが謂はゆる否定の否定であり、そして資本は間斷なしに斯かる否定の否定を行つて自らを増殖することにより始めて資本として存立しうるのであり、従つてその生涯は全くかゝる『否定の否定』の連鎖から成るのである。



以上の事例が明示する如く、辯證法にいふところの否定は、事物の單なる排斥・または事物の單なる破壊・を意味するものではない。それについては、更にエンゲルスが、次ぎの如く説明してゐる。

「辯證法における否定は、單に否なといふことでなく、一つの物を存在してゐないと斷言することでもなく、またそれを勝手な仕方で破壊することでもない。既にスノーザは *Omnis deterrimatio est negatio* すなはち一切の限定もしくは規定は同時に否定であると言つた。更に否定の様式は、辯證法にあつては、第一には過程の一般的な・第二にはその特殊的な・性質によつて規定されてゐる。私はたゞ否定するばかりでなく、また否定を更に止揚すべきである。だから私は、第二の否定が依然可能であるか又は可能になるやうに、第一の否定を整へなければならぬ。然らばそれは如何にしてか？ 各個の場合々々の特殊な性質に應じてである。例へば私が麥粒を砕いたり、昆虫を蹂みにじつたりしたならば、なるほど私は第一の行爲を完成するに相違ないが、しかし第二の行爲を不可能にする。あらゆる種類の物は、否定によつて或る發展が生じ來たるやうに否定されるために、各々特有の様式をもつてゐる、それはあらゆる種類の觀念や概念について見ても同じことである。微分においては、負の根から正の自乗を作る場合とは、異なつた仕方

で否定される。すべての他の場合におけると同じく、そのことは事實について學ばねばならぬ。麥の莖も微分も否定の否定に屬するといふだけの・單なる知識をもつてしては、私は麥の栽培に成功することもできねば、微分も積分もできはしない。」〔「反デュロツク論」、ドイツ本、一四五頁。河野・林雨氏譯本、二二五—二二六頁。〕

否定の否定が如何にして行はれるかは、エンゲルスの言つてゐる通り、「すべての他の場合におけると同じく、事實について學ばねばならぬ。」辯證法は何よりも現實を重んずるのであり、その使命は思惟をして現實の忠實なる反映たらしめることに盡きる。すべての問題は事物について觀察するべきであり、たゞ頭の中で考へ出さるべきではない。たゞ頭の中で考へ出されたものは、辯證法にとつては一切無用のものである。もし吾々が辯證法のこの根本的な性質をさへ充分に理解してゐるならば、吾々は否定が如何に行はるべきかの當面の問題についても、それを頭の中から考へ出すべきでなく、専ら事實について學ばねばならぬ。といふことは、言ふまでもない。

假にこれを麥粒について見るに、もしそれが粉に挽かれたり醸造されたりして、パンやビールに變化し、人間によつて飲食されるならば、麥粒そのものの發展過程は妨げられる。それは適當な土壌の上へ落ち、適度な温度と濕氣とのもとに置かれる場合にのみ、それ自身のうちに含んでゐる自己否定の機能を發揮することができ、自分自身で發芽する。かゝる仕方によつてのみ。麥粒の「自己運動」は行はれるのである。更にこれを貨幣について見るに、もしそれが前に述べた運動とは逆に、商品の運動を媒介することにより、



なる運動をなすに止まるならば、それは單なる貨幣として支出されるのであり、運動はそれきりで終りになる。例へば私が農夫として自分の作つた米(W)を賣りて之を貨幣(G)に代へ、しかる後その貨幣(G)をもつて織物(W')を買ふならば、貨幣は私の手から離れたきりで再び手に歸つては來ない。この場合における第二段の過程  $G \rightarrow W$  (一定の貨幣を支出して商品を買ふこと)は、前に資本の運動について述べた場合の第二段の過程  $G \rightarrow W$  (資本としての貨幣が商品に轉形すること、例へば資本家が轉賣の目的をもつて或る商品を仕入れること)と、その形式は同じであるが、しかし前の場合は後の場合と異なり、貨幣は資本として放下されるのでなく、單なる貨幣として消費されるのであり、これを麥粒の例に當てはめて言へば、適當な土地の上に蒔かれるのでなく、例へばパンにして食用に供せられるが如きものである。それは新たな發展が生じ來たるやうな否定の仕方ではない。すなはち、生産手段を買ひ入れるために行はれる貨幣の否定は、否定の否定を可能ならしめる仕方においての否定であり、單なる生活資料を買ひ入れるために行はれる貨幣の否定は、第二の否定を不可能ならしめる性質の否定である。かゝる否定の仕方では、その貨幣は、それ自身を増殖するところの自己運動をなす貨幣としての・資本とはなりえない。「否定の様式は、辯證法にあつては、過程の性質によつて規定される」とは、このことである。資本の運動過程の一環としての貨幣の自己否定は、特殊の様式における否定たることを必要とするのである。

なほ序ながら一言しておくが、場合によつては、否定の否定の結果として、最初のものとは著しく

異なる産物が生ずることもある。例へば、商品流通の發展過程においては、單なる商品は自己を否定して貨幣となり、更に單なる貨幣は自己を否定して資本となる。この場合、資本はもとより單なる商品に復歸するのではない。また例へば、次第に温度の高まる状態のもとでは、氷は否定されて水となり、水は更に否定されて蒸氣となるのであるが、この場合にも、否定の否定の産物たる蒸氣は、最初の出發點たる氷と甚しくその品質を異にするのである。要するに、すべての事實について學ばねばならぬのである。

## 六 總括——辯證法的唯物論

以上吾々は、唯物論と辯證法とを別々に吟味して來た。しかし既に第二章の一において述べたやうに、唯物論的見地——すなはち實在の世界(自然および社會)を先入見的に觀念論的妄想のない人間の誰でも眼に映するがまゝに把握しようとする立場——を徹底せしめるかぎり、元來實在の世界そのものが辯證法的に構成されてゐるのであるから、吾々は必然的にこの實在の世界を辯證法的に把握せざるをえなくなる。かくて唯物論の發展し徹底した姿は辯證法的唯物論であり、また觀念論的辯證法はその發展の過程において自己の反對物たる唯物論的辯證法に轉化せざるをえない。唯物論と辯證法とは、かくしてその本來の統一に齎らされる。——一八四五年の秋(少くともこの時代に、あるひは何程かそれ以前に)マルクスおよびエンゲルスが公式化しえた唯物史觀または史的唯物論は、正に



マルクスの『フォイエール、ハッハに關するテーゼ』の第一節以下には、次ぎの如く書かれてゐる。

「すべて從來の唯物論(フォイエール、ハッハも含めて)の主要缺陷は、對象・現實・感性が、客體または直觀の形態のもとにのみ把握され、感覺的人間的活動・實踐として主觀的に把握されることである。だから活動的方面は、唯物論への對立において、觀念論——それは當然に現實的な感性的な活動を斯かるものとして認めないもの——から、抽象的に説明された。フォイエール、ハッハは、感性的な——思考客體から現實的に區別された——客體を求めた、だが彼等は、人間的活動そのものを對象的活動として把握しなかつた。だから彼等は、キリスト教の本質の中で、理論的な働きのみを眞に人間なものとして觀察し、それに引きかへ實踐は、その汚らしきユデア人間的な現象形態の中でのみ把握され固定されてゐる。かくて彼等は、「革命的な」實踐的批判的な活動の意義を把握してゐない。」(以上第一節。)

「環境と教育との變化に關する唯物論の學説は、環境が人間によつて變化され且つ教育者自身が教育されねばならぬといふことを忘れてゐる。だからそれは、社會を二つの部分に——そのうち

かゝる見地から人間の歴史を把握したものである。吾々は章を改めて之を吟味しよう。

## 第三章 史的唯物論(唯物史觀)

### 一 唯物論の社會(または歴史)への擴張



一つのもは他のものに超越してゐる——分たねばならぬ。  
環境と人間的活動との變化の合致すなはち自己變動は、革命的實踐としてのみ把握され合理的に理解されうる。」(以上第三節。)

右のテーゼは、エンゲルスが『新世界觀の天才的萌芽を藏してゐる最初の文書としてこの上もなく貴重なもの』と稱したものであるが、なかんづく以上拔萃した二節の中には、フオイエルバッハを乗り越えて進んだマルクスおよびエンゲルスの辯證法的唯物論の特徴が、從來の唯物論の缺陷に對して、簡潔に表現されてゐる。今それを簡単に他の言葉で表現すれば、唯物論の人間社會への擴張、環境と人間との辯證法的關聯の把握、人間社會の歴史をその『自己運動』または『自己變動』において把握すること、これがマルクスの茲に問題としてゐるところである。

しからば、唯物論の人間社會への擴張とは何を意味するか？ 次ぎに掲げるエンゲルスの言葉は、それに對する解答である。

『フオイエルバッハが、單なる自然科學的唯物論は、たしかに「人間の知識の建物の基礎ではあるが、建物そのものではない」と言つたのは、全く正當であつた。何故なら、吾々は單に自然の中に生活し、ゐるだけでなく、人間社會の中に生活してゐるのであり、後者はまた前者に劣らず自己特有の發展史と科學とを有してゐるのだから。従つて社會科學を・言ひ換へれば、謂はゆる歴史哲學的科學の總體を・唯物論的基礎に調和させ、この基礎の上に再建することが、肝要であ

つた。しかし、かういふことは、フオイエルバッハには許されなかつた。この場合彼等は「基礎」があるにも拘らず、依然として傳統的な觀念論の圏内に縛りつけられてゐたのである。このことは彼れ自身も「後方では予は唯物論者と一致するが、前方ではさうでない」といふ言葉で認めてゐる。」(佐野文夫氏譯『フオイエルバッハ論』、六六一―六七頁。)

フオイエルバッハが「後方では予は唯物論者と一致するが、前方ではさうでない」といつてゐる言葉そのものが、最も簡潔に、彼れの唯物論の主要缺陷を示してゐる。彼等は、下半身においては唯物論者であつても、上半身においては、その唯物論を徹底せしめることが出來ず、結局において從來の觀念論から脱却することが出來なかつた。今マルクスおよびエンゲルスにとつての問題は、この唯物論をその上部にまで完成することであつた。史的唯物論(または唯物史觀)は、唯物論を人間社會の上に適用し、たゞに自然のみならず人間社會をも之を唯物論的に觀察することによつて、從來の唯物論の主要缺陷を補つたものである。『フオイエルバッハから成長し、やくざ學者等との鬭争のうちに成熟した・マルクスとエンゲルスとは、當然に、唯物論の哲學をその上部に向つて竣工することに、言ひ換へれば、唯物論的認識論ではなく唯物論的史觀に、その最大の注意を向けた。これがためマルクスとエンゲルスとは、その著書において、辯證法的唯物論よりも、辯證法的唯物論を強調し、史的唯物論よりも史的唯物論を主張したのである』とレーニンが言つてゐるのも、同じことを指すのである。(河上譯『レーニン・辯證法的唯物論について』、六四―一六五頁)に『史的唯物論よりも史的唯物論



を主張した」と言つてゐるのは、たゞ唯物論を主張したのではなく、これを人間社會の歴史の上に適用することを主張した、といふ意味なのである。

しからば、「辯證法的唯物論よりも辯證法的唯物論を強調した」とは、如何なる意味であるか？ それは、從來の唯物論の主要缺陷たる・人間社會の觀察に際しての發展の見地の缺如を補ふことを力説した、といふ意味である。私はそのことを、先きには、環境と人間社會との辯證法的關聯の把握といふ言葉で言ひ現はした。次ぎにそのことを説明しよう。

すでに第一章で述べたやうに、十八世紀におけるフランスの唯物論者は、(フォイエールバツハもこの點においては同じであるが)、その唯物論を社會の上に徹底せしめることが出来なかつた。L'homme est tout education (人間は全く教育に依存する)といふのは、フランスの唯物論者エルベチウスの言葉であるが、この場合「教育」といふのは、環境なかんづく社會的環境の影響の總體を指してゐるのである。(先きに掲げたマルクスの「フォイエールバツハに關するテーゼ」の第三節に見えてゐる「教育」または「教育者」なる言葉も、これと同じ意味に用ひられてゐるのであるが、それについてはなほ後に至つて述べる。)すなはち人間は全く教育に依存するとは、人間は全く環境の影響に依存するといふ意味なのであるが、それだけの範圍では別に問題はない。問題はその環境が如何にして變化されるかである。そしてこの問題になると、從來の唯物論者は、その唯物論を歴史または社會の上に徹底せしめなかつたことの結果として、歴史のうち人間の意識的、活動的作用をのみ見て、かゝる人間の意識から獨立に形成されるところの社會的環境の本質を理解することが出来なかつた。そこで一方では、前に言つたやうに、人間をもつて社會的環境の產物であるとなしながら、それならその社會的環境は如何にして變化されるかといふ問題になると、今度はその社會的環境をもつて輿論(すなはち人間の意見、意識)の產物となし、社會的環境は人間の意識によつて規定されるものとなした。人間の理念が曇つてゐるために、様々な不幸な社會的環境が出来上がつてゐるのであるから、かゝる環境を改造するためには、人間の理性を蔽うてゐる種々の曇りを拂はねばならぬ、かゝる風に彼等は考へたのであり、そこからして、人間の理性(人間の本性)に適つた一つの理想社會を案出し、それを宣傳することによつて新社會を現出しようといふやうな、謂はゆる空想的社會主義なるものも、生まれてくるやうになつたのである。だが、かうなつてしまへば、それは全く唯物論の拋棄であり、一たびは「周圍の社會的環境によつて與へられる印象に従つて自己を構成する白臘」の如きものとされた人間の頭腦が、いつの間にか斯かる環境の創造者にされてしまつてゐるのである。そこに從來の唯物論の不徹底さが横たはつてゐる。

もちろん、人間は社會的環境の產物であると同時に、その社會的環境はまた人間の意見によつて支配される。吾々はそのことを否認するものではない。だが、かういふやうに二つの現象の間の相互關係または交互作用を認めただけでは、問題は決して根本的に解決されるものではない。鳥は卵から生まれる、しかし卵はまた鳥から生まれる。卵が悪から悪い鳥が生まれた、しかし悪い卵が出来たの



は鳥が悪いからである。斯様にして問題はいつまでも循環するものであり、それは決して事物を根本的に把握するゆゑんではない。

今この問題の解決について重要なことは、マルクスの言葉によれば、『環境が人間によつて變化され且つ教育者自身が教育されねばならぬ』といふことを、明瞭にすることである。こゝに『環境が人間によつて變化される』とは、もとより人間の意見によつては環境が變化されるといふ意味ではなく、それが人間の實踐（産業上の實踐）によつて變化されるといふ意味である。また『教育者自身が教育される』とは、人間に影響を與へるところの社會的環境そのものが、絶えず人間によつて影響される、といふ意味である。人間の社會的環境は彼れ自身の實踐によつて絶えず變化される。もちろん人間はこれによつて如何なる變化が社會的環境の上に起るか、最初から意識してゐるわけではなく、既に一定の變化が起つた後でも直ちにそれを遺漏なく意識しうるわけではないが、しかし客觀的には、かゝる人間の實踐によつてその社會的環境（社會的存在）は絶えず變化するのであり、しかも人間はまた斯かる社會的環境の產物であり、その社會的意識は社會的存在によつて規定されてゆくのである。だから謂はゆる人間の本性なるものも、決して一定不變のものではなく、その社會的環境の變化によつて絶えず變化してゆくのである。『労働は人間と自然との間の一過程であり、人間が彼れと自然との間の物質代謝を彼れ自身の行爲によつて媒介し、規制し、管理するところの一過程である。……彼れは、自然の物材をば彼れ自身の生活のために用ひうる形態で占有せんがため、彼れの肉體に屬する諸

々の自然力を、腕と脚・頭と手を、運動状態におく。彼れは、この運動により彼れの外部にある自然の上に働きかけて、これを變化し、かくして同時に彼れ自身の本性を變化する。』（『資本論』第一卷、第三章、第五章。河上・宮川譯『岩波文庫』版、三一〇頁。）かゝる見地からすれば、人間の本性そのものが既に歴史的發展の產物であり、絶えず變化してゆくものであるから、従つてあらゆる時代・あらゆる民族・にとつて最善の理想社會となるやうなものを、人間の本性（不變なもの）と考へられた人間の本性）を基準にして案出するといふやうなことは、全く無駄なことであり、吾々は何をおいても先づ社會的存在の現實を科學的に研究せねばならぬといふことになるのである。そしてまた吾々は、かゝる見地に立つことによつて、前に述べたやうな相對立した・外見上互に矛盾した二つの命題を、——すなはち人間は社會的環境の產物であるといふ命題と、社會的環境は人間の意見によつて支配されるといふ命題とを、——辯證法的に一個の全體に統一することが出来るのである。意識と存在との間にはもちろん交互作用が行はれてゐるのであり、従つて吾々の社會的生活には、存在が意識を規定する方面があると同時に、意識が存在を支配する方面もありうるのであるが、しかし根本的には——結局においては——存在が本源的なもので意識は派生的なものであるといふ見地が、すなはちそれである。私が先きに『環境と人間との辯證法的關聯の把握』といつたのは、この點を指すのである。

要するに、人間の社會的環境は人間自身が造り出すものであるにも拘らず、それは人間の意圖・意識から獨立してゐるものであり、むしろ人間の社會的意識は社會的存在の反映にすぎないとなすこと



のうちに、社會または歴史に對する唯物論の徹底的適用が實現されるのである。ところで、すでに人間の社會的存在をもつて人間の意識から獨立してゐるものとするならば、その社會的存在の進化はもちろん人間の意識・精神・思想等から説明さるべきものではなく、それは一の自然的過程として、『自己運動』として・理解されねばならぬ。先きにマルクスが『環境と人間の活動との變化の合致すなはち自己變動』といつてゐるのが、それに當たる。以下吾々の説明せんとするところの史的唯物論（または唯物史觀）は、すなはち斯かる見地に立つて人間の歴史を理解せんとするものに外ならぬ。

## 二 人間の社會的生活における基本的な對立物——生産諸力と生産諸關係

『發展は對立物の鬭争である』。人間の世界は、自然と人間といへる對立物の鬭争——人間による自然の征服ならびに人間に及ぼす自然の影響——によつて發展する。だから人間の現實的な生活は、——すなはちエンゲルスのいう *die Produktion und Reproduktion des wirklichen Lebens*（現實的な生の生産および再生産）または『ドイツ・イデオロギー』にふところの *die Produktion des Lebens, sowohl des eignen in der Arbeit wie des fremden in der Zeugung*（労働においては自己の・生殖においては他人の・生の生産）、あるひは『政治經濟學批判』の序言中にある謂はゆる唯物史觀の公式の冒頭における『人間の生の社會的生產』は、——最初から二重性をもつた一

個の關係（*ein doppeltes Verhältnis*）として現はれる。その二重性の一方は、人間の自然に對する關係であり、他方は、人間相互の關係である。『ドイツ・イデオロギー』マルクス・エンゲルス・アルヒーフ、第一卷、ドイツ本、二四六頁）にいふところの『如何なる條件のもとに・如何なる仕方であらうなる目的のために・行はれるものたるを問はず、多くの人々の共同の働きといふ意味においての社會的な關係』なるものが、すなはちそれである。前者は人間と自然との間における物質交換または物材代謝（*Stoffwechsel*）の關係であり、後者は人間相互の間における労働交換の關係である。（労働による生産物の交換は結局において労働の交換である。）かくて前の關係においては人間の『生産諸力』（人間が有用物を造り出すために役立つ諸々の力）が現はれ、後の關係においては彼等の『生産諸關係』が現れる。

この生産力と生産關係とは、生の生産といへる統一物のうちに見出されるところの、最も一般的な・最も根本的な・對立的契機である。これらの對立物は、生の生産とさぐる *ein doppeltes Verhältnis*（二重性を有つた一個の關係）の二個の *Seite*（方面）または *Momente*（契機）である。これらの對立物は、不可分離的に統一されてゐる。孤立せる個人は、現實には存しない。苟くもそこに人間の生の生産が行はれてゐるといふならば、それは同時に、そこに多數人の *Zusammenwirken*（共同の働き）が行はれてゐることを意味する。現實における生産力の發揮は、必ずそれ自體のうちに生産關係の存立を含むのであり、生産關係の存立なくして生産力の發揮はありえない。だから生産力と



生産關係との辯證法的統一は、唯物史觀にとつて根本的問題の一つである。

### その一 二様の意義における生産力

私は先づ生産力とは何であるかを明かにしやう。

マルクスの用ひてゐる『生産力』なる言葉には、異なつた二様の意味があるから、それを明確に區別することが、第一に肝要である。第一の意味における生産力とは、有用物（財、富）の生産に役立つ力のことである。かゝる意味においては、例へば機械は、疑ひもなく一つの生産力である。

『機械は、鋤をひく牛が経済的（社会的）範疇でないと同じやうに、経済的範疇ではなく、それは一つの生産力（eine Produktivkraft）たるにすぎない。』（『哲學の貧困』、ドイツ本、一一七頁。）それと同じやうに、分業も一つの生産力であり、（『政治經濟學批判』、ドイツ本、三三頁）、作業の繼續性といふが如きものもそれ自身一つの生産力である。（『資本論』、第二卷、カウツキー版、二三三頁。）『ドイツチェ・イデオロギー』（『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』、ドイツ本、第一卷、二四六頁）には、更に下記の如き注意すべき言葉もある。

「……一定の生産の仕方はいつも協力の一定の仕方と結びついてゐる、そしてかゝる協力の仕方はそれ自身一つの生産力である。」

なほ革命的な階級は、生産諸力の極端となりつゝある生産諸關係を打破し、生産諸力のより以上の

發展を可能ならしめる新たな生産諸關係の建設に貢献するといふ點において、それ自身また一つの生産力である。『哲學の貧困』（ドイツ本、一六三頁）に、『すべての生産用具のうちで、革命的階級それ自身が最も偉大な生産力である』と述べてゐるのは、そのためである。

此の如く、生産力として計上さるべきものには、色々な種類のものがある。だから、人間社會に歸してゐる諸々の生産力の總計を指す場合には、多くは複數形の Produktivkräfte または Produktionskräfte なる文字が用ひられてゐる。私が多くの場合に『生産諸力』なる言葉を用ひるのも、その複數性を明かにせんがためである。『政治經濟學批判』の序言中にある唯物史觀の公式を見れば、『人間は、彼等の生の社會的生產において、……彼等の物質的生產諸力の一定の發展段階に適應するところの生産諸關係を、與へられたものとして受取る。』

『その發展の一定の段階において、社會の物質的生產諸力は、現在の生産諸關係と矛盾に陥る。』『……むしろかゝる意識が、物質的生活の矛盾から、社會的生產諸力と生産諸關係との間における現存の撞着から、説明されねばならぬ。』

といふやうに、そこにはすべて複數形が用ひられてゐる。これらは、後に説明する第二の意味の生産力と混同されざらんがために、特に『生産諸力』と譯出するを適當とするであらう。それは、『ドイツチェ・イデオロギー』（『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』、第一卷、ドイツ本、二五九頁）に、『人間に歸したる生産諸力の數量』（Die Menge der den Menschen zugänglichen Produktivkräfte）



などいへると、同じ意味である。

【註】吾々が茲に生産力と譯出してゐる言葉は、ドイツ語ではProduktivkraftまたはProduktionskraftとなつてゐる。双方とも同じ意味の言葉であるけれども、強ひて區別すれば、前者を『生産的の力』とし、後者を『生産力』としても差支なからう。『ドイツチェ・イデオロギー』には、これら二つの言葉が何等の區別なくまぢまぢに用ひられてゐる。カウツキーの『唯物史観』(一九二七年)に至つては、兩語の混用が殊に甚しう。例へば、第一卷九頁には Produktionsverhältnisse, die einer bestimmten Entwicklungsstufe ihrer materiellen Produktivkräfte entsprechen と云ふマルクスの言葉が引用されてゐるが、この同じ引用句中にある Produktivkräfte が、八〇六頁に掲出される場合には Produktionskräfte とされ、つぎの八〇七頁では再び Produktivkräfte とされてゐる、等々である。

以上述べたところが第一の意味における生産力である。これに對し私が第二の意味の生産力といふのは、労働の生産力といふ場合のそれであるが、それはやはり Produktivkraft なる文字で言はされてゐる。だがこの場合の生産力といふのは、一定分量の労働が有用物を生産する力のことであつて、それは労働の Produktivität (生産性または生産度) あるひは労働の Produktivvermögen (生産能力)といふのと、同じ意味である。かくて第一の意味における生産力は、絶対的の大きさを示すに反し、第二の意味における生産力は、相対的の大きさ——一つの比——を示す。なぜといふに、労働の生産能力は、生産のために費される労働の分量(これは労働時間によつて測られる)と・それによつて生産される生産物の分量と・の比によつて言ひ現はされるのだから。

【註】タアルハイマア(『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』第二卷、五七三頁)は、以上述べたるが如き

生産力の二義について、次ぎの如く述べてゐる。

『もしも吾々が、相対的の大きさ又は比率規定としての生産力と、ある絶対的の大きさとしての生産力(その場合は、普通、複數で Produktivkräfte と云ふ)とを、厳密に區別しなかつたならば、吾々は決して事態を明瞭にすることができぬ。第一の意味においては、Produktivkraft [生産力]—Produktivvermögen [生産能力]—Produktivität [生産度]であり、それは一つの比率數として定義される、すなはち——<sup>時</sup>使用價値の數量であり、一單位の時間内に産出されたる使用價値の數量を示すところの或る數である。絶対的の大きさとしての、第二の意味における生産力は、使用價値の生産力に参加してゐる或る要素以上の何物をも指すのでなく、かゝる諸要素のすべてに對する一般的名稱に外ならぬ。……』

以上述ぶるが如く、第一の意味における生産力と第二の意味における生産力とは、その内容を異にしてゐるのであるが、しかしこの二つのものは互に密接な連絡をもつてゐる。私はなほそのことを言しておく。

人間による自然の加工に役立ちうる諸々の力、かゝる力(すなはち第一の意味における生産力)が現實に自然に働きかける場合には、いつでも人間の労働を媒介とする。それゆゑに、社會に歸屬せる生産諸力(マルクスのいふ社會的生產諸力)の發展は、原則として、社會的労働の生産能力(すなはち第二の意味における生産力)の向上となつて現はれる。一定の社會が利用しうる生産諸力の總量が増加すればするほど、それにつれて、一定分量の使用價値(富、財)を生産するために必要とされる人間の労働の分量は減少するのであり、逆にいへば、一定分量の労働をもつて生産されうる富の分量は増加するのであり、そのことは取りも直さず労働の生産能力の増進を意味するのである。かくて勞



働の生産力の増進は、原則として、社會の生産諸力の増加を示す指數となるのである。(尤も社會の生産諸力の増加が單に労働者數の増加に基づくに止まる場合には——すなはち他の諸事情には何等の變化なく、たゞ労働する者の人員が増加したといふことのために、一定の社會が自然に向つて働きかけるための力の總量が増加しただけであるといふやうな場合には——社會の生産物の總量は増加するにしても、一單位の労働(例へば一時間分の労働)によつて生産される生産物の分量には變化なく、従つて謂はゆる労働の生産力には變化がない。だから、第一の意味における生産力の増加は、いつでも例外なしに第二の意味における生産力の増進を齎らすとは限らない。私が先きに原則として云々といつたのは、そのためである。)

以下吾々が差しあたり問題とするところは、すべて第一の意味における生産力である。だから私はそれを指すために、原則としては複數形の生産諸力なる言葉を用ひることにする。

## その二 社會の生産諸力の構成

すでに以上述べたる如く、生産諸力のうちには、人間の利用のために動員されたる種々雑多のあらゆる力が網羅される。それは種々なる標準から種々に分類されるが、私はこれを次ぎの三部類に分かつ。

一、人間によつて占有されたる自然力(水力、風力、等々)

### 二、人間

(a) 自然力としての人間(労働者の數、その體質、等々)

(b) 社會力としての人間 (イ) 労働の社會的組織、等々

(ロ) 革命的階級、等々

### 三、人間の生産物

(a) 物質的生産物(生産手段)

(b) 精神的生産物(科學)

先づ第一の自然力について述べよう。私がこゝに『人間によつて占有される』自然力といふゆゑんは、單なる自然は、そのまゝでは、人間のための生産諸力を構成しないからである。それは、人間によつて利用されうる状態に占有されてから、はじめて人間のための生産諸力を構成する一要素となる。自然に存立する労働対象のうち、たゞ自然全體から切り離されるだけの労働を受けるに止まるもの——例へば、水中で捕獲さるべき自然生の魚類、地中から掘り出される鑛石、自然林から伐り取られる木材等々——は、未だ生産諸力の構成分とならざるものである。それらは、例へば既に採掘された鑛石でこれから洗滌されようとしてゐるもの(すでに人間の支配下に屬するもの)と、その範疇を異にする。マルクスが『資本論』(第一卷、カウツキー版、一三四頁参照。)において、特に後者を原料(Rohmaterial)と名づけ、注意深くもこれを前者から區別したことは、以上の理由に基づくのである。

次ぎに人間はそのものがまた一つの生産力である。『資本論』の或る個所(第一卷、カウツキー版、一三三頁。河上・宮川共譯『岩波文庫』本、三一〇頁。)には、それについて次ぎの如く述べてある。



「労働は先づ人間と自然との間の一過程であり、人間が彼れと自然との間の物材交換を彼れ自身の行為によつて媒介し、規制し、管理するところの一過程である。人間は自然の物材に對し、それ自身一の自然力として對立する。彼れは、自然の物材を彼れ自身の生活のために用ひうる形態で占有せんがため、彼れの肉體に屬する諸々の自然力を、肩と脚・頭と手を、運動状態におく。彼れは、この運動により彼れの外部にある自然の上に働きかけてこれを變化し、かくして同時に彼れ自身の天性を變化する。彼れは、彼れ自身の天性のうちに眠つてゐる諸々の潜在力を展開して、彼れ自身の天性の諸力の活動を自分自身の統制のもとにおく。」

人間は此くの如くそれ自身一の自然力として自然の上に働きかける。私が前記の表の「二、人間」のaを「自然力としての人間」となしたのは、そのためである。ところで、人間は最も言葉通りの意味において *sozial politikon* (社會的動物) である。「人間は生産において、たゞに自然に對してのみ關係するのではない。彼等は一定の仕方において共同に働き彼等の活動を相互に交換することによつてのみ、生産する。生産するがためには、彼等は相互に一定の連絡および關係に入り込み、且つこれら社會的の連絡と關係との内部においてのみ、自然に對する彼等の關係は成り立ち、生産が行はれる。」(賃労働と資本)、『マルキシズム叢書』中の拙譯本、四六頁。それゆゑに、これら社會的の連絡および關係から生ずる社會的な力が、人間にとつてはまた一つの重要な生産力である。「ドイッチェ・イデオロギイ」にある「一定の生産の仕方は……さつと協力 (*Zusammenwirken*) の一定の仕方と結びついて

ゐる」といふ句の次ぎへ、マルクスが特に「そしてかゝる協力の仕方はそれ自身一つの生産力である」といふ句を挿入してゐるのは、そのためである。私は序ながら注意しておくが、以上列擧したる如き生産諸力を構成する諸要素と、労働の生産力を規定する諸條件とは同一物たることをえない。例へば「外界の自然的諸條件——生活資料に關する自然的な富、すなはち土地の豊饒性、魚類に富める河海、等々と、労働手段に關する自然的な富、例へば活力に富める水落、航行されうる河海、木材、金屬、石炭、等々」は、労働の生産力を規定する條件の一つたるに相違ないが、しかしそれらのものは、人間によつて占有される以前は、未だ生産諸力の構成成分となつてゐるものではない。マルクスが「労働の生産力は、多様な諸事情により、なかんづく労働者の熟練の平均程度、科學の・およびその技術上における實用性の・發展段階、生産過程の社會組織、生産手段の範圍および作用能力により、且つ諸々の自然事情により、規定されてゐる」と言つてゐるのは、『資本論』第一卷、カウツキー版、八頁。——言ひ換へれば労働の生産力を規定する諸條件のなかへ、生産諸力の構成成分にあらざる「諸々の自然事情」を包括せしめてゐるのは、——以上の理由からである。前記の表の「二、人間」のbとして掲げた「社會力としての人間」は、此の如き人間相互の連絡によつて生ずる社會力(自然力に對立するものとしての)を總括するものである。

「労働は先づ人間と自然との間の一過程である」だが人間の物質的生産にあつては、かゝる過程の生産物そのものが、更にその過程に入り込み、人間と自然との間に介在する。生産物としての労働對



象（原料）と同じく生産物としての労働手段とが、すなはちそれであり、これらのものは何れもみな人間にとつての有力なる生産力である。

最後には、たゞ物質的な生産物のみならず、精神的な生産物もまた、一つの生産力として作用する。

「批判の武器はもちろん武器の批判に代位しえない、物質的な力は物質的な力によつて覆へられねばならぬ。しかしながらまだ理論は、それが大衆を掴むや否や、物質的な力となる」。『ヘーゲル法律哲學の批判』、『獨佛年誌』、ドイツ版、七九頁。それと同じやうに、科學は人間の精神的労働の産物であり、それ自身はもちろん物質的な生産物に代位しえないけれども、しかしまた科學は、それが物質的な生産過程に應用されるや否や、有力な物質的な生産力となる。科學はもちろん謂はゆる上層建築の一部に屬する。それは生産過程の欲求から生まれたものではあるが、物質的な生産物ではない。しかしそれは、生産過程の上に應用されることにより、改めて一つの物質的な生産力となる。私が前記の表の『三、人間の生産物』を分かつて、物質的なものと精神的なものとの二つとなしたのは、そのためである。

私は最後に、以上述べたるが如き生産諸力のなかで、何が決定的の重要性を有するかを一言しておかねばならぬ。今吾々にとつては自然と人間との間における闘争のうち、人間の側から自然に向つて能動的に働きかける闘争が問題なのであるが、かゝる見地からすれば、あらゆる生産諸力のうち吾々にとつて決定的の重要性を有つものは、生産手段（それには労働対象たる原料と、道具、機械等の如き労働手段とが含まれる）のうちの労働手段でなければならぬ。けだし労働手段は人間自身が彼れの

能動的な活動によつて生産したものであり、それ自身が人間の生産物である。しかも他の生産手段（原料）と異なり、それは「彼れの活動（彼れの能動的な活動）をその対象に傳へるための導體として役立つ」ものであり、従つて人間がその生産的活動にあたり「直接に左右する対象」（『資本論』、第一卷、河上・宮川共譯『岩波文庫』本、三一三頁。）となるものは労働対象ではなく却てこの労働手段である。斯様にして労働手段は、あらゆる生産諸力のうち、人間の自然に對する能動的な働きかけを、最もよく代表しうる性質を具へてゐる。『労働手段の使用と創造とは萌芽状態においてこそ既に若干の動物種類に屬してゐたといへ、それは特に人間的な労働過程を特徴づけるものであり、それゆゑにフランクリンは人間を「道具を造る動物」と定義したのである』（同上、三一四頁）。かくて労働手段の發展は、大體において、人間社會における生産諸力の總量の發展に適應するものとなる。マルクスが労働手段をもつて「人間の労働力の發展の測度器」（Gradmesser der Entwicklung der menschlichen Arbeitskraft）であるとなしたのは、そのためである。

### その三 生産諸關係および生産の仕方

以上述べたる如く、生産諸力とは、人間が自然に働きかけるために役立つものとして人間の支配下に歸屬してゐる諸々の力のことであり、かゝる生産諸力の總量によつて、人間の自然に對する積極的な關係は規定されてゆくのであるが、他方において、人間がこれらの生産諸力を利用して自然に働き



かけるに當つては、そこに必ず人間同志の共同の働きが成り立つのであり、従つて人間相互の間に種の社會關係が結ばれる。吾々はそれを名づけて生産諸關係 (Produktionsverhältnisse) とし、すなはち生産諸關係とは、人間が「彼等の生 (または生活資料) の社會的生產において」互に取り結ぶに至るところの・物に結びついてゐる・社會的諸關係の總稱である。

ところで、マルクスの用語には、右の生産諸關係の外に、しばしば用ひられるところの生産の仕方または生産様式 (Produktionsweise) なる言葉がある。例へば、『政治經濟學批判』の序言中における唯物史觀の公式には、生産諸關係、生産の仕方、ならびに前に述べた生産諸力なる言葉が、次ぎの如く現はれてゐる。

「人間は彼等の生の社會的生產において、一定の・必然的の・彼等の意志より獨立の・諸關係を、彼等の物質的生產諸力の一定の發展段階に適應するところの生産諸關係を、與へられたものとして受取る。これら生産諸關係の總和は、社會の經濟的構造を……形成する。物質的生活の生産の仕方、社會的の・政治的の・および精神的の・生活諸過程一般を制約する。」

こゝに生産の仕方 (または生産様式) といふは何を指すか? それは生産諸力および生産諸關係と如何なる關係に立つか? 私は更にそのことを説明しよう。

一八九四年にエンゲルスの認めた手紙の中には、次ぎの如き言葉がある。

「吾々が社會の歴史の決定的な土臺と考へるところの・經濟的諸關係 (ökonomische Verhältnisse) なるものは、一定の社會の人間が彼等の生活資料を生産し且つ (分業が成立してゐる限りにおいては) 生産物を相互に交換するところの・様式 (Art und Weise) を意味する。」

こゝにエンゲルスが經濟的諸關係といふのは、言ふまでもなく吾々が茲に問題としてゐるところの・生産諸關係と、全く同じものであるが、彼はそれを説明して生産 (および交換) の様式であるとしてゐる。これで見ると、生産諸關係といふのも生産の仕方 (または生産様式) といふのも、全く同じものであるかに見える。なほ彼は、『反デューリング論』の中で、生産諸力と生産諸關係の矛盾といふことの代りに、生産諸力と生産の仕方との矛盾について云々してゐる。例へば『新たなる生産諸力は既にそれらの利用に關するブルジョア的形態を乗り越えて成長してゐる。そして生産諸力と生産の仕方との間に斯かる衝突は云々』(ドイツ本、二八七頁。河野・林兩氏譯本、四六〇頁。) といひ、あるひは『生産の仕方は交換の仕方に對して反逆する、生産の仕方を乗り越えて成長したる生産諸力は生産の仕方に對して反逆する。』(同上ドイツ本、二九七頁。譯本、四七六頁。) といつてゐるが如くである。

そこで例へば次ぎの如き解釋が生じる。

「生産の仕方 (または生産様式) とは何であるか? 辯證法的唯物論は、生産の仕方をば、人間が生産または勞動する場合に彼等相互に結ぶところの相互的な連絡または關係・あるひは極く簡



單にいへば、労働に際しての人間の相互的關係の意味に解する。』(『タアルハイマア』辯證法的唯物論入門』、ドイツ本、一三四頁。高橋氏譯本、一八六頁。)

だが、右の如く説明し去つては、生産の仕方と生産諸關係とが全く同じ意味の言葉になり、次に例示するが如きマルクスの文章は理解しがたきものとなる。

『私が本書で研究せんとするところは、資本家的な生産の仕方およびそれに適應する生産および交易の諸關係である。』(『資本論』、第一卷、第一版序言。カウツキー版、前付三七頁。河上・宮川共譯『岩波文庫』本、一一頁。)

『一定の生産の仕方およびいつもそれに適應する生産諸關係、簡単にいへば社會の經濟的構造は云々。』(『資本論』、第一卷、第一章、脚註三三。カウツキー版、四五頁。同上譯本、一二五頁。)

『人間は新たな生産諸力の獲得と共に彼等の生産の仕方を變化し、且つ生産の仕方の——彼等の生活資料を獲得する様式の——變化と共に、彼等はすべて彼等の社會的諸關係を變化する。』

『哲學の貧困』、ドイツ本、九二頁。淺野晃氏譯本、一七九頁。)

『……十一世紀の人間とは如何なるものであつたか、彼等のその時々々の欲望・彼等の生産の仕方・彼等の生産の原料・は如何なるものであつたか、最後に總ての斯かる生存諸條件から生じた人間對人間の連絡は如何なるものであつたか、云々。』(同上、ドイツ本、九七頁。譯本、一九二頁。)

もし生産の仕方と生産諸關係(または社會的諸關係、人間對人間の連絡)とが、全く同じことを意味するのであるならば、『生産の仕方およびそれに適應する生産諸關係』などいふが如き以上の諸表現は、全く意味をなさないことになる。

私の見るところによれば、生産の仕方(または生産様式)とは、文字通り生産的活動の行はれる仕方(または様式)であり、これをマルクスの他の言葉に翻譯すれば、人間が『彼等の生活資料を獲得する様式 (die Art, [die Menschen] ihren Lebensmittel zu gewinnen) である。人間は彼等の生活資料を獲得するために自然へ加工する、それが人間の生産的活動であり、そしてかゝる生産的活動のために役立つものとして人間に歸屬せる一切の力の總和が生産諸力である。だから、生産の仕方または人間の生産的活動の様式とは、畢竟するに、かゝる生産諸力が人間によつて活用される様式(生産諸力からいへば、生産諸力の活動の姿態)である。ところで、人間の生産的活動は必ず社會的行はれるのであるから、かゝる活動のためには、いつでも人間の自然に對する關係と・人間の人間に對する關係との二重性をもつた關係が生まれる。〔生産諸關係が人間對自然および人間對人間の二重關係から成り立つことは、マルクスが『資本論』において、『古代の社會的諸生産組織は、労働の生産力の低き發展段階によつて、且つそれに適應せる・物質的生活の内部における人間相互の間の・および人間と自然との間の・狹隘なる關係によつて、制約されてゐる。』(第一卷、カウツキー版、四二頁)といひ、また『生産の當事者が自然に對し且つ相互に對し有するところの・彼等がそのうちで生産するところの・諸關係』(第三卷、第二分冊、ドイツ本、三五三頁。)など言つてゐるので分かる。謂はゆ



る『生産諸力がそのうちで自らを展開するところの諸關係』(『哲學の貧困』、ドイツ本、一〇五頁)とはそれを指すのであり、そしてそれが取りも直さず吾々が茲に問題とするところの生産諸關係なるものである。だから生産の仕方といふも、生産諸關係といふも、結局は同じことに歸するのであるが、しかし一方は人間の生産的活動の様式であり、他方は人間と人間・および人間と自然・との間に結ばれる關係の様式であるといふ點において、そこに言葉の立て方——指さす方面——の差異が存するのである。前者は關係を動的に現はし、後者は關係を靜的に現はしてゐる。そこで、例へば、次の如き表現がありうる。

『生産の仕方は(従つてまた)生産諸力がそのうちで自らを展開するところの諸關係は、決して永久的な法則ではなく、むしろ人間の・および彼等の生産諸力の・一定の發展状態に適應するものである。』(『哲學の貧困』、ドイツ本、一〇五—六頁。)

なほ『資本論』第三卷における次ぎの言葉も、吾々にとつて参考となるであらう。

『以上吾々は、資本家的生産過程が社會的生産過程一般の一の歴史的に規定された形態であることを、見て來た。この後のものは、人間の生活の物質的存立諸條件の生産過程であると同時に、また特殊な・歴史的經濟的な・生産諸關係のうちで行はれるところの——かゝる生産諸關係そのものを、従つてまたかゝる過程の當事者・彼等の物質的存立諸條件および彼等相互の諸關係を、すなはち彼等の一定の經濟的社會形態を、生産し且つ再生産するところの——過程である。何故

なれば、かゝる生産の當事者が自然に對し且つ相互に對して有するところの・また彼等がそのうちで生産するところの・これら諸關係の全體こそは、正にその經濟的構造の側から見た社會なのであるから。』(『資本論』、ドイツ本、第三卷第二分冊、三五三頁。)

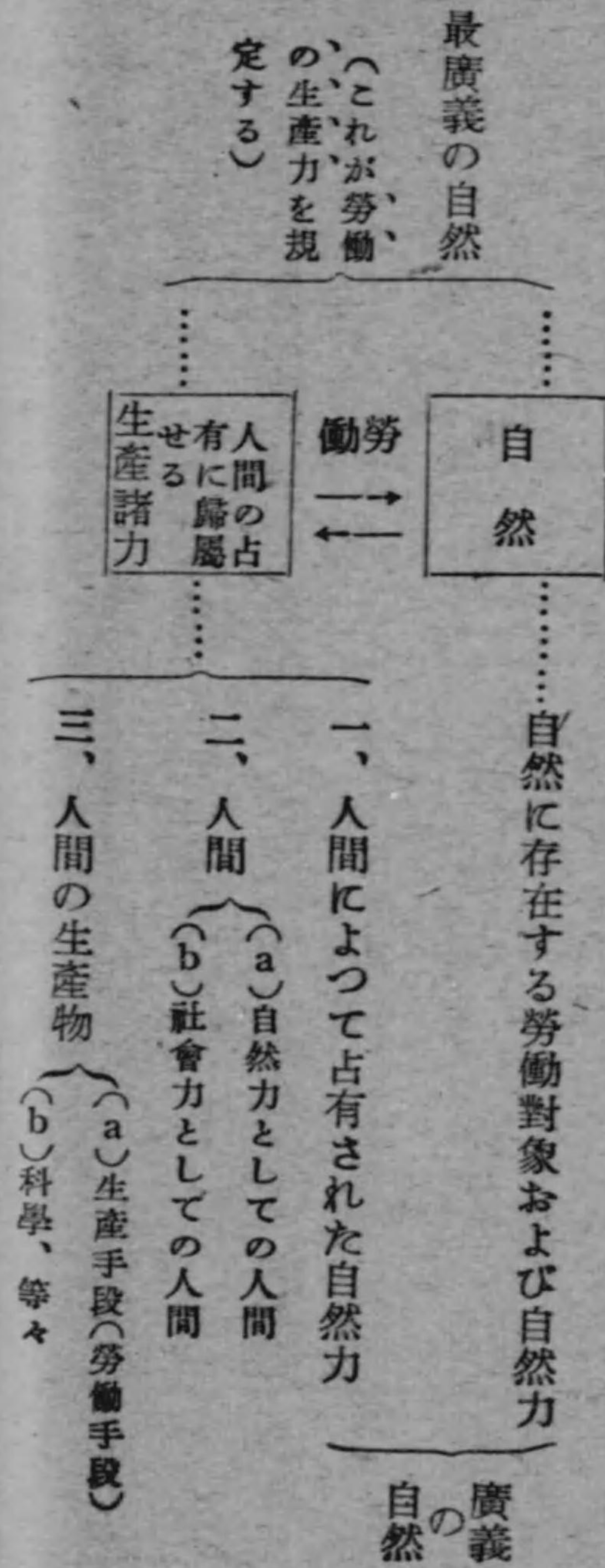
右の一文のうち、生産過程といふ言葉は、人間の生産的活動を動的に見たものであり、そして吾々が茲に問題としてゐるところの生産の仕方(または生産様式)なるものは、すなはち斯かる生産過程の様式を指すのである。かゝる生産過程は一定の生産諸關係のうちで行はれるが、それらの關係は、『生産の當事者が(一)自然に對し(二)且つ相互に對し有するところの關係』から成り立つのである。そしてこれら諸關係の總和は、なほ後に至つて述ぶるが如く、社會の經濟的構造を形成するものであり、これら諸關係の全體は、『正にその經濟的構造の側から見た社會』なのである。つまり一定の生産の仕方の行はれてゐる社會は、一定の生産諸關係の總和から成るのである。

生産の仕方および生産諸關係なる言葉の意味は、以上の如くである。私は更に、これらのものと生産諸力との關係を一言しておかう。

すでに述べたる如く、生産の仕方とは生産諸力が人間によつて活用される様式(または仕方)のことであるから、それは當然に生産諸力の發展につれて變化する。すなはち生産諸力が一定の發展をなしたならば、それら生産諸力の構成分の上に・またその總量の上に・一定の變化を惹き起し、(例へば、



新たに機械が發明されたならば、そのために生産諸力のうち労働手段の占むる地位が従前よりも遙に重要なものとなり、且つそれと同時に、生産諸力それ自體の總量が激増する、かくて必然的にそれら生産諸力の發揮の仕方すなはち生産の仕方の上に一定の變化を惹き起すのである。ところで、既に生産の仕方が變化すれば、それは必ずまた、人間對自然の關係における變化および人間對人間の關係における變化——すなはち生産諸關係の變化——を伴ふものである。かくてそこには次ぎの如き一連の連鎖が存在するのである。(一)生産諸力の變化——(二)生産の仕方の變化——(三)生産諸關係の變化。だから例へば、資本家的生産の仕方は、あらゆる他の特定の生産の仕方と同じやうに、社會的、生産諸力とその發展諸形態との一定の段階を、その歴史的條件として前提する、……そしてこの特殊な、



歴史的に規定された・生産の仕方、に適應する生産諸關係は、——人間が彼等の社會的生存過程のなかで、彼等の社會的生活の創造のなかで、與へられたものとして受取る諸關係は、——一の特殊な・歴史的な・且つ過渡的な性質をもつのである。『資本論』、第三卷第二分冊、ドイツ本、四一五頁。)

以上述べたるところにもとづき、自然、人間、生産諸力、生産諸關係、労働の生産力、等の間における關係は、前頁の如く表示される。

### 三 生産諸力と生産諸關係との辯證法的關係

發展は對立物の闘争である。吾々人間にとつての世界の發展は、自然と人間といへる對立物の闘争の過程である。そしてこの闘争の過程を人間的なものとして特色づけるところのものは、人間の側から自然に向つて働きかける能動的な意識的な活動である。『蜘蛛は織工のそれに類似した作業を行ひ、蜂はその蜂窩の建築によつて多くの人間の建築師を慚愧せしめる。しかし最も拙劣な建築師をして最初から最も巧妙な蜂に卓越せしめるところのものは、人間の建築師は蜂窩を蜂蠟で建築する以外にすでに彼れの頭のうちで建築してゐるといふことである。労働過程の終りには、その始めに際しすでに労働者の表象のうちに従つてすでに觀念的に存在してゐたものが、結果として出てくる。彼れはたゞ自然的なるものの形態變化を生ぜしめるだけではない。彼れは自然的なるものうちに同時に彼れの目的を——それは彼れの意識してゐるところの彼れの行爲の様式および仕方を法則として規定すると



ころの・そしてそれには彼れが自己の意志を従屬せしめねばならないところの・彼れの目的を——實現するのである。』『資本論』、第一卷、カウツキー版、三三三—三四頁。河上・宮川共譯『岩波文庫』本、三一〇—三一頁。』かゝる活動によつて、はじめて人間にとつての世界の發展（人間の歴史の展開）が行はれる。『余の環境に對する余の關係は、余の意識である。ある關係の存在するところ、それは余にとつて存在する。動物は何物とも關係せず、一般に關係を有たない。動物にとつては、他に對する彼れの關係が、關係として存在しない。』『ドイツチエ・イデオロギー』、『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』、第一卷、ドイツ本、二四七頁。』此の如く人間は彼れの外界に對する意識的な活動によつて彼れ自身の歴史を創造してゆくのであるが、この場合、その活動の動力となるものは、人間の利用のために動員される有らゆる生産諸力の總計に外ならぬ。人間と自然との鬭争において、人間の側から自然に對して働きかける積極的な鬭争力は、一にかゝる生産諸力の總量によつて規定される。だからそれは、人間の歴史にとつての根本的な動力なのである。

ところで、すでに述べたやうに、『人間は生産において、たゞに自然に對してのみ關係するのではない。彼等は、一定の仕方において共同に働き彼等の活動を相互に交換することによつてのみ、生産する。生産するがためには、彼等は相互に一定の連絡および關係に入り込み、そしてこれら社會的の連絡と關係との内部においてのみ、自然に對する彼等の關係は成り立ち、生産が行はれる。』だから、人間の自然に對する鬭争としての生産過程は、すでに述べたやうに、最初から二重性をもつた一個の關係のうちで行はれる。すなはち、一方においては人間の自然に對する關係と、他方においては人間相互の關係と、これら二つのものが、同時に一個の關係の二つの方面として現はれる。『ドイツチエ・イデオロギー』、『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』、第一卷、ドイツ本、二五九頁。』『*ein historisch geschichtliches Verhältnis zur Natur und der Individuen zueinander*（自然に對する・ならびに個人相互の、歴史的に造られた一個の關係）といふ言葉が特に用ひてあり、（『ドイツチエ・イデオロギー』はマルクスとエンゲルスとの合著に成るものであるが、この言葉はマルクスが後から更に挿入したものである）、また同書の他の部分（同上、二四六頁）に、『生の生産は…一個の二重性をもつた關係として、——一方では自然的關係として、他方では社會的關係として、——現はれる云々』といふ言葉が用ひてあるのは、そのためである。人間が自然に働きかける場合には、そこに必ず此の如き二面性をもつた・すなはち人と人との社會的關係でありながら、しかも物に結びついてをり、従つてその一面は人と自然との關係であるところの・關係が成り立ち、そしてそれら諸關係のうちこそ、人間の支配下に屬してゐる種々の生産諸力は始めてその機能を發揮するのであるが、それらの諸關係は——すでに述べたやうに——吾々が名づけて生産諸關係（または經濟的諸關係）といふところのものであり、そしてこれら生産諸關係の全體はすなはち社會の經濟的構造を形成してゐるのである。

『社會の經濟的構造』または『經濟的社會形態』なるものは、取りも直さず吾々の社會的存在の姿であるが、今吾々にとつての問題は、かゝる吾々の社會的存在は如何にして發展するか、詳しくいへ



ば、社會的存在の一定の形態は、如何にして成立し發展しやがて没落し、かくてより高度の新たな形態にその席を譲るに至るかである。辯證法的唯物論は、人間の社會的生活それ自身のうちに含まれてゐる對立的契機を發見し、それら對立物の鬭争過程として人間の社會的存在を把握することにより、かゝる社會的存在（經濟的社會組織）の形態の進化を一の自己運動として把握する。かくてそれは生産諸力と生産諸關係との鬭争の過程として現はれる。私は進んで更にその點をより明かにするであらう。

生産諸力と生産諸關係とは、人間の生(Leben, life)の社會的生產といへる一個の統一物のうちに含まれてゐる對立物である。それらは、あらゆる他の辯證法的對立物と同じやうに、互に不可分離的に連絡されてをりながら、しかも互に背離し撞着し矛盾するの必然性を有してゐるがゆゑに、正に社會的生產の發展にとつての辯證法的な契機である。（以下吾々は、様々な生産諸力および生産諸關係に對する一般的名稱として、しばしば生産力および生産關係なる單數形を用ひる。）

何が故に兩者は不可分離的に連絡されてゐると云ふか？ すでに述べたる如く、『生産するがためには、人間は相互に一定の連絡および關係に入り込み、且つこれら社會的の連絡との内部においてのみ、自然に對する彼等の關係は成り立ち、生産が行はれるのである』。だから既に一定の人間が自然に對立して之に働きかけるための一定の生産力を支配してゐるとするならば、同時に彼等相互の間には

必ず一定の生産關係が結ばれてゐるのであり、かゝる生産關係を離れて現實には如何なる生産力の發揮もありえない。その意味において生産力と生産關係とは不可分離的なものである。

此の如く生産力は生産關係を離れて存在しえないのであり、生産關係は生産力たるための一つの存立條件である。だから生産關係はまた一つの生産力(eine Produktivkraft)なのであり、生産力と生産關係といへる對立物は此の如くにして同一物である。吾々はすでに第二章の三において、レーニンの次ぎの言葉を説明した。『辯證法とは、如何にして對立物が同一でありうるし且つあるか、(如何にして對立物はさうなるのか)、如何なる條件のもとに對立物は互に轉化して同一となるか、何故に人間の悟性はこれらの對立物を死んだ凝固的なものとしてとなしに、むしろそれらを生きた・條件づけられた・運動的な・相互に轉化し合ふものとして觀察するか、といふことの學理である』。今ここでは生産力と生産關係との同一性を把握することが肝要である。

歴史の如何なる段階においても『一つの物質的な結果が、生産諸力の一つの合計が、自然に對する、ならびに個人相互の・歴史的に造られた一つの關係が、存在してゐる』。(『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』第一卷、ドイツ本、二五九頁。)この與へられたるがまゝの人間社會にあつては、——この與へられたるがまゝのものが吾々にとつての研究の出發點であるが、——生産力と生産關係とが『一つの共通なる紐帶により、相互的な連絡により統一に齎らされてゐる』。『對立物は、それ自身に向つて、離れなく存在するのでなく、一個の同一性を形成する。對立と矛盾とは同一性のうちに含まれてゐる』。



る。『吾々は『生』の生産といへる統一物を、吾々の思惟により、その構成成分としての生産力と生産關係との對立的要素に分離しうる。だが現實に存在するものは、かゝる對立的諸要素から成る統一物自體であり、對立的諸要素は共通の紐帯により統一されて共同の地盤に立つ。それらは共同の地盤に立つがゆゑに始めて對立物となりうるものであり、——共同の地盤なきところ對立の地盤もまたありえない、——その共同の地盤における相互の矛盾衝突が始めて全體の地盤を、人間の『生』の生産を、『それ自身に運動するもの』たらしめるのである。

生産關係はそれが一つの生産力であるかぎり、他の生産諸力と同一であり、共に社會の生産諸力のうちに統一されてゐる。だがこの統一が分裂するとき、一の生産力たりし生産關係はその反對物たる破壊力に轉化し、對立物として他の生産諸力に對抗する。かくて對立物の鬭争としての生の發展があり、歴史の進行が實現される。『何等の矛盾なく、何等對立物の鬭争も、それら對立物相互の間における何等の推移も、行はれぬところには、また何等の發展、何等の生命、何等の推進力も存在しない。』『もしも世界において一切のものがそれ自身と同一であつたならば、そこには何等の變化、何等の發展も起らぬであらう。自然の根本法則は運動である。ところで運動は、一の形態の他の形態への變化であり、一のもの他のものへの連續的推移である。世界の全現象は、一の形態あるひは現象の他のものへの永久なる變化に立脚する。形態轉化の進行・發展過程は、對立物の轉化といふ方法によつて行

はれる。しかし、これらの對立物は、統一のうちに含まれてをり、この統一の分裂から出てくる。『一切の世界の進行を自己運動において、自發的發展において、生ける實在において認識するための條件は、それらば對立物の統一として把握することである』と、レーニンは正しく言つてゐる。發展は對立物の「鬭争」を意味する。』（デボリン『レーニンの辯證法』、河上譯、七〇頁。）

生産關係は一つの生産力である。だが一定の生産關係は、それ以外の生産諸力の發展が一定の高さに達するとき、それらとの連絡調和を失ふこと（統一の分裂）により、『生産諸力の發展形態からそれらのものゝ桎梏に轉化する。』（『政治經濟學批判』序）。かくて『社會的生產諸力と生産諸關係との撞着』（der Konflikt zwischen gesellschaftlichen Produktivkräften und Produktionsverhältnissen）が起る。一の生産力としての生産關係は、その反對物たる生産力の桎梏としての破壊力に轉化する。それにつれてまた、多くの生産諸力（Produktionskräfte oder Produktivkräfte）が、轉化してその反對物たる破壊諸力（Destruktionskräfte oder Destruktivkräfte）となる。』（『ドイツ・イデオロギー』、前掲ドイツ本、二五七、二八二頁、參照。）今かくなりたる時代を指して、マルクスは『こゝにおいてか社會革命の時代來たる』といふのである。

破壊力としての生産諸關係と・生産力としての生産諸力との『鬭争』において、もしも生産諸力がその桎梏となれる生産關係を打破することができなければ、社會の生産諸力はそれ以上の發展を阻止され、當該社會の進歩は停頓し、その社會はやがて退化し滅亡する。これに反し、社會がその發展



を繼續するかぎりにおいては、社會の生産諸力の發展に對する桎梏たる現存の生産諸關係が破壊されねばならず、それに代つてその廢墟の上に一の新たな生産諸關係が成立せねばならぬ。そしてその新たな生産諸關係のもとにおいて、解放されたる生産諸力は始めてその發展を繼續しうるものであり、従つてこの新たな生産諸關係は、再び一の生産力に轉化し、(一)の形態から他の形態への絶えざる推移の實現)、爾餘の生産諸力と連絡調和を保ち、生産諸關係と生産諸力との統一が再び恢復されるのである。

以上述べたるが如き生産諸力と生産諸關係との矛盾撞着は、生産諸力にして絶えざる發展をなしつつあるかぎり、——しかも生産諸力の發展の停止は、人間の自然に對する闘争力の發展の停止であり、それは人間の歴史の・人間の物質的および精神的の生活の發展の・停止を意味する、——必然的に潜在するものであり、いつかは不可避的なものとならざるをえない。何故といふに、生産諸力の一定の發展段階においては、一定の生産諸關係(例へば封建的な諸關係)が恰もそれら生産諸力の活動に適應してゐたとしても、生産諸力の發展は停止するところなきものであるから、その發展が或る程度以上に達すると、それらの生産諸力は、從來の生産諸關係のもとでは、種々なる束縛制限を感じざるをえざるに至るからである。それは恰も、一定の衣服は小供の生活のために缺くべからざるものであつたとしても、その子供の成長を前提とするかぎり、從來の衣服は必然的に次第に窮屈なものとなり、そして小供の成長がある點以上に達すると、それを無理やりに着せておくことが、小供の發育に對する

桎梏(手がせ足がせ)とならざるをえないのと、同じことである。一定の衣服は、嘗ては子供の成長のため缺くべからざる物であり、確に一の有用物であつたけれども、以上述べたるが如き理由により、小供の成長がある程度以上に達すると、嘗ての有用物は必然的にその反對の有害物に轉化するのである。かくして成長しゆく小供のからだと着物との間に、矛盾撞着が起る。そして遂には着物の方が張り裂けてしまふ。それは、風船玉が内部からの壓力により爆裂するが如くに、爆裂するのである。マルクスが、資本家的社會の末路を叙述するに際し、例へば『資本論』の中で(第二卷、カウツキー版、六九一頁)、『生産手段の集中と労働の社會化とは、それが資本主義的な外被(外部の被ひものといふ意味で、資本主義的な生産諸關係を指す)と兩立しえざる點に達する。かくて外被は爆裂(sprengen)する』といふやうな言葉を用ひてあるのも、そのためである。

なほこの點に關し、序に一言しておきたいと思ふことがある。周知の如く、マルクスの『政治經濟學批判』の序言のうちにある唯物史觀の公式の一節には、社會組織(生産諸關係の總和としての社會經濟的の構造)の變革に關し、次ぎの如き意味の言葉がおかれてある。

『一の社會組織は、すべての生産力とその組織内において餘地あるかぎり、その發展をなし遂げたる後にあらざれば、決して顛覆し去るものではない、云々』

これは大正八年、『社會問題研究』第三號に載せた私の譯文であるが、私はその當時より今日まで約



十年の間、この文句を、マルクスの原文でなしに、右の如き私の譯文で、いつの間にか記憶してしまつてゐた。そして近頃は、私の記憶してゐるマルクスのこの言葉を、時折思ひ浮べながら、これはどうも正確でないと思へるやうになつた。マルクスがこの言葉を書き記してから約七十年になるが、今日となつてはその表現の形式を少し改めなくてはならぬであらう、———そういう風のことを、私は時折思ひ浮べてゐた。

ところが、最近にマルクスの原文を調べて見て、始めて気付いたことは、訂正を必要とするのは、マルクスの原文そのものではなく、私の譯文だ、といふことである。マルクスの文章は、今から七十年前に書かれたものだけでも、それは今日においても猶ほ極めて正確なものである。それを私は久しい以前から不正確に譯出し、そしてその不正確な譯文をマルクスの言葉だとのみ思ひ込み、且つ斯かる廻り道をなすことにより、近頃ではマルクスを訂正しなくてはならぬのではないかといふやうな、間違つた考を起すことになつてゐたのである。

尤も不正確な譯し方をしてゐたのは、私だけではない。高橋龜吉氏の『日本資本主義經濟の研究』(三二頁)における引用句は、あるひは私の譯文を用ひられたものであるかも知れないので、問題外におくが、今日まで『經濟學批判』と題する譯本が三種現はれてゐるから、一應それを調べて見よう。

最も古いのは佐野學氏の譯本(大正十二年發行)であるが、それには問題の個所が、——前に掲げた私の譯文と全く同じやうに、———次ぎの如く譯出されてゐる。

「一の社會組織は、總ての生産力がその組織内において餘地あるかぎり其の發展をなし、遂げたる後、あらざれば、決して顛覆し去るものでなく、云々。」(五頁)

また昭和二年に改譯版が發行されてゐる宮川實氏の譯本では、そこが次ぎの如くなつてゐる。

「ある社會組織は、生産力がその組織の許すかぎり發展してからでなく、決して滅亡するものではなく、云々。」

更に本年四月『マルクス・エンゲルス全集』のうちに收められた猪俣津南雄氏の譯文を見るに、それもほゞ同じことである。

「一つの社會構成は、そこに發展する餘地あるすべての生産諸力が發展してゐない内に、破滅することは決してなく云々。」(前掲全集、第七卷、四一六頁)。

以上いづれの譯文によるも、私が今問題としようとする點については、大體において同じである。詳しくいへば、私が今問題としようとするところは、一定の社會組織と生産諸力との關係に存するのであるが、以上列擧した何れの譯文によるも、一定の社會組織は、その組織内において生産諸力が多少なりとも發展する餘地あるかぎり、決して没落するものではない、といふ意味の主張になつてゐる。これは果して正しいであらうか？これが果してマルクスの主張せんとするところであらうか？私は先づその點を吟味しよう。

試に現在の瞬間における世界資本主義の體系について見るに、この體系内には生産諸力の發展の餘



地がなほ充分に存在してゐる。

ブハリーンは第一次の世界戦争以後今日に至るまでの期間を三つの時期に分けてゐるが、彼れの言ふところによれば第一の時期は、一九二三年末をもつて終つてゐる。そしてそれに引續く第二の時期は、彼れ自身の言葉によると、『經濟的見地から、資本主義的經濟の分析の見地から、資本主義の體系内における生産諸力の恢復の時期と名づけられうる』ものである。なほこれに引續く現在の時期は、資本主義的經濟の復興の時代であつて、その復興は戦前の水準を量的にも質的にも凌駕してゐる。一方には技術の上に可なり著しい進歩があり、他方には資本家的經營の上に改造が行はれたために、そこには明かに生産諸力の増大が實現されつゝある。試に主なる二三の國々について見るのに、例へば、米國における『一般的な發展傾向は、産業の成長・生産の増大といふことである。』また『ドイツの資本主義は、むしろ急速に發展しつゝある。』なほ戦前には資本の利子で食つてゐたフランスも、今はしつかりした産業國に轉化しつゝある。たゞイギリスは、大體において降り坂にあるが、しかし或る方面では、イギリスのブルジョアジーも、生産諸力を高めることに成功してゐるのであつて、謂はゆる新産業の領域はこれに屬する。かういふのが、現在における世界資本主義の狀勢である。だから、本年（一九二九年）一月十五日に至るまでの最近四半期におけるウアルガの年報にも、『一般的にいつて、資本主義的生産の容積は、一九二八年度においてさうであつたやうに、一九二九年度においても、引續き向上線をたどるであらうといふことが、推定されうる』との、推測を掲げてゐるのである。

これを要するに、今日の世界資本主義の體系内において、生産諸力の發展の餘地がなほ少からず存在してゐるといふことは、疑ふべからざる事實である。それのみではない、もし吾々が、トルコおよびアフガニスタンの如き、あるひはまたイギリスの諸領地および南アメリカの若干の國々、すなはち『資本主義がたゞに前進しつゝあるのみでなく、若々しい急速な前進をなしつゝある・廣い領域』が、なほ世界のうちに残つてゐるといふ事實を、考慮に入れるならば、世界資本主義の體系内における生産諸力の發展の餘地は、何程かの程度において、將來といへども、なほ引續き存在するであらうといふことをすら、豫想せざるをえないのである。

そこで顧みて、唯物史觀の公式におけるマルクスの立言を見ると、吾々の譯文によれば、すでに述べたやうに、

「一の社會組織は、すべての生産力とその組織内において餘地あるかぎり其の發展をなし遂げた後にあらざれば、決して顛覆し去るものでなく、云々」

としてある。だから、もしこの言葉が正しいのであるならば、（そして餘地あるかぎり云々といふ言葉は嚴密に解釋するならば）、現在の資本主義的組織は將來なほ久しきに亘つて存續するであらう、といふ結論が生じるわけである。

だが、すでに暗示しておいたやうに、唯物史觀の公式における問題の個所は、吾國において從來久しく不正確に譯出されてゐたのであり、その原文は本來次ぎの如くなつてゐるのである。



Eine Gesellschaftsformation geht nie unter, bevor alle Produktivkräfte entwickelt sind, für die sie weit genug ist……『一の社會形態は、その形態をもつて充分な廣さであるとなすところの・すべての生産諸力が、發展してからでなくては決して没落せず、云々』その意味を別の言葉で言ひ現はせば、次ぎの如くである。『一の社會形態は、その社會形態のもとで發展した生産諸力に對し、その社會形態が狹ますぎるやうにならぬ以前には、決して没落しない、』かういふ意味なのである。問題の中心は、für die sie [Gesellschaftsformation] weit genug ist といふ句にあるのだが、この句は、生産諸力が現存の社會組織を狹まき、感じない、といふことを意味するのである。

これについて今一つ引用したいのは、堺利彦氏の譯文である。『無産者パンフレット』の第九冊として、同氏の『唯物史觀要約』なるものがあり、それには『獨・英・和・三國語對照および註釋』なる副題がついてゐるが、その一九頁には、私が今問題とした個所について、次ぎのやうに書いてある。

『初のところの「フニール・デー・ジー・ワイト・ゲヌーグ・イスト」といふ原文の意味が、どうも充分はつきり分らない。』

すなはち、私が今問題の中心であるといつた一句の意味が、『どうも充分はつきり分らない』と、堺氏は言つてゐられるのである。しかし同氏は問題の句を『その内部に餘地を與へられてゐるところ』と譯出しつゝ、それについて次ぎの如く言つてゐられる。

『英譯の for which there is room in it と今一つの英譯の for which it affords room と、河上譯の「その組織内で餘地あるかぎり」とを比べ合せて、私は「その内部に餘地を與へられてゐるところ」として見た。多分これで可なりしつくり嵌まつてゐるだらうと思ふ。』

だが『餘地あるかぎり』を『餘地を與へられてゐるところの云々』と訂正したところで、結局は同じだと私は思ふ。英譯文二種ともまたその意味において大差はない。——私はたゞこの場合、堺氏が早くこの個所をとまかくも問題とされた、といふことだけを、明かにしておく。

些細なことを詮索するやうだけれども、『餘地あるかぎり』といふのと、『狹ますぎるやうにならぬかぎり』といふのとでは、これを嚴密に解釋すると、その意味するところが大分相違する。例へば、一定の會場にはまだ人のはいる餘地があるといふことと、入場してゐる人々がすでに窮屈に感じてゐるといふこととは、決して同じではない。たとひ入場してゐる人々はすでに窮屈さを感じ始めてゐるとしても、倉庫に荷物を入れるやうに、天井まで人間を積み重ねてしまへば、この會場にでもまだく澤山の人を——現在よりも數倍、十數倍の人を——おし込めることができる。

すなはち、マルクスが weit genug ist と言つてゐるのを、『餘地がある』と譯出するのと、『充分な廣さである』と譯出するのでは、さしたる相違はないやうで、實は大分意味が違ふことになる。そして正確なのはもちろん後の譯文の方である。そこでまた、吾々がマルクスの立言に従つて資本主義的體系の没落について考察する場合にも、そこにまだ生産諸力の發展の餘地があるかないか、とい



ふ點に問題が横たはるのではなく、問題はむしろ、すでに發展した生産諸力に對して現存の資本主義的體系が狭ますぎることになつておはしないかどうか、といふ點に横たはるのである。そして、もしもそれが既に狭ますぎることになつておれば、社會の物質的生產諸力と・現存せる生産諸關係と・の間には矛盾衝突が起らざるをえないのであり、そしてそうなれば、マルクスの言葉によると、Es tritt dann eine Epoche sozialer Revolution ein(かくて社會革命の時代が到來するのである。これを要するに、一定の社會組織が没落して、それが他のより高級な社會組織に席を譲ることになるのは、從來の社會組織のもとで生産諸力の發展が少しも實現されえなくなつてからではない。むしろ生産諸力が發展しつゝある最中に從來の社會組織が sprengen するのである。問題は、生産諸力の發展がすでに停止されてしまつたか否かにあるのではなく、生産諸力のより以上の發展が現存せる生産諸關係のために束縛され阻害される段階にまで到達してゐるか否かにあるのである。

人間が自然に働きかける場合に彼等相互の間に結ばれる社會的諸關係の總和、それが社會の經濟的構造を形成するのであり、そしてかゝる社會の經濟的構造は、以上述べたるが如き關係において、社會に歸屬する生産諸力の總和の變動につれて變動する。しかるに、すでに述べたる如く、社會の生産諸力のうち最も決定的に重要さをもつものは労働手段であり、従つて労働手段は「人間の労働力の發展の測度器」となるものである。だからマルクスは、『資本論』(第一卷、カウツキー版、一三六頁。河

上・宮川共譯『岩波文庫』本、三一四頁。)において、次ぎの如くにも述べてゐるのである。

「遺骨の構造が没落せる種屬の身體組織に對して有すると同一の重要さを、労働手段の遺物は没落せる經濟的社會組織の判斷に對して有する。諸々の經濟時代を分つところのものは、何が作られるかでなく、如何にして、如何なる手段をもつて作られるかである。労働手段は、たゞに人間の労働力の發展の測度器であるばかりでなく、また労働がそのうちで行はれるところの社會諸關係の指示器でもある。」

#### 四 社會の經濟的構造の構成成分としての純經濟的諸關係および政治經濟的諸關係

以上述べたるところによつて考へれば、生産諸關係の總和たる社會の經濟的構造の變革を必然的ならしめるところのものは、社會に歸屬せる生産諸力(すなはちマルクスのいふところの社會的生產諸力)の發展に外ならない。ところで後に述べるやうに、社會の經濟的構造なるものは、その上に社會の政治的および觀念的な上層建築が生ひ立つところの土臺であり基礎であり、これらの上層建築はその土臺たる經濟的構造の變動につれて變動する。だから、結局のところ、社會全體を動かすところの根本動力となるものは、常に發展して已まざるところの社會的生產諸力である。簡単にいへば、この生産諸力なるものが人間の歴史によつての根本的な動力となるのである。なほ生産諸力と生産諸關



係との矛盾撞着は、これまた後に至つて述ぶるが如く、一の階級と他の階級との間における闘争（謂はゆる階級闘争）となつて、社會の表面に現はれる。だから、唯物史觀（史的唯物論）の立場からすれば、社會的諸現象は常に生産諸力の發展と階級闘争の進展とに結び付けられて觀察されねばならぬ。レーニンが「辯證法は、問題となれる社會的諸現象をその發展において全面的に分析すること、ならびに外觀的なものを基礎的な推進力に・生産諸力の發展と階級闘争とに歸せしめることを、要求する」と言つてゐるのは、そのためである。（『レーニン全集』、ロシア本、第十八卷第一分冊、一四三頁。河上譯「レーニンの辯證法」、一八六頁に引用するところ。）

以上のことが充分に理解されるためには、なほ種々なる問題が説明されねばならぬ。以下私は順序を追うてそれらの諸問題を整理して行かう。

すでに述べたる如く、社會の生産諸力の發展によつて一定の時期に不可避的な變革を餘儀なくせしめられるところの、一定の社會の經濟的構造なるものは、その上に生ひ立つてゐる有らゆる上層諸建築の土臺となれるものであるから、一定の社會を理解せんとするに當つては、吾々は先づその土臺たる經濟的構造を分析せねばならぬ。それゆゑに、マルクス主義にあつては、かゝる經濟的構造の分析をその任務となす經濟學をもつて、つねに社會的諸現象の根本的理解のための基礎知識となしてゐるのである。社會の經濟的構造に對する理解は、此の如き重要さを有する。それゆゑに私は、他の問題

に進む前に、なほ少しく此の經濟的構造の構成分について若干の説明を補充しておきたいと思ふ。社會の經濟的構造とは、すでに屢々述べたる如く、生産諸關係（經濟的諸關係）の總和に外ならぬのであるが、私の見るところによれば、かゝる經濟的諸關係は、——社會が階級社會であるかぎり、——言はゞ純經濟的關係といふべきものと・政治經濟的關係といふべきものと・の二種から成り立つてゐる。だから社會の經濟的構造を研究の對象となす學問は、たゞ單に經濟學と稱するよりも、むしろ政治經濟學と稱すべきものであらう。私はかゝる見地から、マルクスの著作 *Kritik der politischen Ökonomie* も、（從來は單に「經濟學批判」と譯出されてをり、また簡單化のためにはさう言ひ慣しても差支ないのであるが）、正確には「政治經濟學批判」と譯出すべきものであらうと考へる。けだしこの書の篇別は、資本、土地所有、賃労働、國家、外國商業、世界市場の六部門から成る豫定であつたのだが、（同書序言の冒頭参照）、このうち初めの三つのもの、すなはち資本、土地所有、賃労働を取扱へる部分は、純經濟過程の領域に屬するのであり、國家以下の部分は、政治的經濟過程の領域に屬するのであるから、その全體は取りも直さず政治經濟學または政治的經濟學（*politische Ökonomie*）なのである。

この政治經濟學なる名稱は、古くは一般に行はれたものである。例へばリカアドウの著書は *Principles of Political Economy and Taxation*（政治經濟學および租税の諸原理）であり、ジョン・ステュアート・ミルの著書も「政治經濟學の原理」である。なほ一八七四年に出たケアンズの著書も同



じやうに Principles of Political Economy と題してあり、一八八三年に出たシチックのそれもまた同様である。そしてこれら著書の内容は、大凡その題名に適應してゐたのである。例へばケアンズの著書は、第一部價值、第二部労働および資本、第三部國際貿易から成つてをり、またシチックのそれは、第一卷生産、第二卷配分および交易、第三卷政治經濟學の技術(The Art of Political Economy) から成り、そして最後の第三卷のうちには『産業に對する政府の諸關係』(第三章)や、『自由貿易および保護貿易』(第五章)や、『財政』(第八章)やが含まれてゐる。しかるにその後經濟學の分化につれ、經濟政策學や財政學やが謂はゆる經濟原論から獨立することになり、そのために經濟原論の著書も(例へばマアシャルやセリングマンやフイシヤア等々の著書における如く)、その題名を Principles of Economics (直譯すれば經濟學の諸原理)とするやうになつた。日本では Political Economy も Economics も共に經濟學と譯出してゐるために、かゝる區別が明瞭でないが、正確には前者を政治經濟學となし、後者のみをたゞ經濟學となすべきである。(もと經濟なる文字は經國済民から出たのであるから、經濟なる文字の本來の意義には政治が含まれてゐるのであるが、今日では例へば石炭よりも電氣の方が經濟的であるといふやうに、經濟なる文字は歐語の economy と同じ意義をもつものとなつた)。

私が今かゝる用語上の詮索をなすゆゑんは、社會の『實在的な(物質的な)土臺』たる『經濟的構造』を構成せる諸關係の種類を明かにし、兼ねてこの『土臺』と『政治的上層建築』との連絡を明かにせんがためである。

社會の經濟的構造は、階級社會にあつては、必ず純經濟的な諸關係と政治、經濟的な諸關係との二つから成り立つ。もちろん現實的には、階級社會の總ての生産諸關係が政治、經濟的諸關係であり、如何なる經濟關係も政治の支配から完全に脱け出てゐない。しかし唯物史觀は先づそれを純經濟的な過程として見ることを要求する。何故なれば、政治は派生的なものであり、經濟こそが基本的なものであるから。詳しくいへば、社會の經濟的構造は、政治的上層建築や觀念的上層建築がその上に生ひ立つところの土臺であるから、それはそれから派生した。従つてそれ自身の歴史を有たぬ・人間の意識(意欲、意圖、等々)から説明さるべきでないのは勿論のこと、同じやうな派生的範疇に屬する政治や法律によつてまた、根本的に説明さるべきものでなく、何よりも先づ、政治や立法やの一切の影響を脱ぎ棄てた純粹の姿での自己運動において觀察されねばならぬのである。

マルクスが簡單なる商品生産の資本家的生産への轉形(すなはち資本家的生産の成立)を説明するに當り、『商品流通およびその簡單なる諸契機を唯一の前提』となすがため、如何に綿密に・むしろ執拗に、等價物と等價物との交換以外に出づる一切の諸條件を残らず捨象してゐるか、(特に『資本論』第一卷第四章第二節、参照)、今日では已に廣く知られてゐるところであるが、エンゲルスは、その著『反デューリング論』中の『強力説』の條下で、それにつき次ぎの如く注意してゐる。



「マルクスは『資本論』において、商品生産は一定の發展段階において自ら資本家的生産に轉形すること、そしてこの段階においては「商品生産と商品流通とに立脚する領有の法則すなはち私有財産の法則が、それ自身の・内的な・不可避的な・辯證法により、その反對物に轉形する……」ことを、火を見る如く明かに證明してゐる。言ひ換へれば、たとひ吾々が總ての掠奪・總ての暴力行爲・および總ての詐偽・の可能性を排除する場合にでも、すなはち總ての私有財産は本源的には所有者自身の労働に基づいてをり、且つその後の全經過においてもたゞ等しき價值が等しき價值に對して交換されるといふことを、吾々が假定する場合にでも、なほ吾々が生産と交換との進展につれて必然的に辿りつくところは、現在の資本家的な生産の仕方であり、少數なる一階級の掌中における生産手段および生活資料の獨占であり、老大なる多數を形成する他の階級の・無産的なプロレタリアへの墜落であり、思惑生産と商業恐慌との定期的交替と生産における現在の全無政府状態とである。全經過の始終は、たゞの一度たりとも掠奪や強力や國家や乃至何等かの政治的干渉を必要とすることなくして、純經濟的原因から説明されてゐる。」(ドイツ本、一六九頁。河野・林兩氏譯本、二六三―四頁。)

レーニンもまた『人民の友とは何ぞや』において、同じ點を注意してゐる。曰く

「マルクスは諸々の社會經濟的形態の中から一つの形態すなはち商品經濟の體制を取り上げる、そして(彼れが二十五年以上も研究した)莫大なる材料に基づいて、この形態の作用およびその

發展の諸法則を詳密に分析する。……マルクスは問題を説明しようとして、これら生産諸關係の外に立つところの或るモメントに、一度も訴へることなく、社會的經濟の商品的組織は如何にして發達するか? それは(すでに生産諸關係の領域内において)ブルジョアジーおよびプロレタリアートの對立的階級を創造しつゝ如何にして資本家的組織に轉形するか? またそれは如何にして社會的労働の生産力を發展せしめ、且つ如何にしてそのこと自身によつて此の資本家的組織そのものの基礎に對し和解しがたき矛盾となるところの諸要素を齎らすか? 等々を知るの可能性を與へる。」(川内氏譯本、七一―八頁。)

資本家的社會の成立發展および没落の全過程が、「たゞの一度たりとも掠奪や強力や國家や乃至何等かの政治的干渉を必要とすることなく」、すなはち「商品生産の諸關係以外に立つところの或るモメントに一度も訴へることなく」、専ら「純經濟的原因から説明されてゐる」といふこと、更に言ひ換へれば、それら一切の過程が一に商品の自己運動の展開として表示されてゐるといふこと、これが資本の純經濟過程の研究としての『資本論』の根本的特徴である。

唯物史觀の立場——經濟的諸關係をもつて全社會の土臺であるとなす立場——からすれば、かゝる純經濟過程の研究こそ最も基礎的なものである。しかし既に述べたやうに、現實の社會においては、それが階級社會であるかぎり、純粹な經濟的過程なるものが經驗的事實として存在するはずはない。だから、例へば資本家的生産の成立過程も、——その不可缺の條件は、労働が商品として市場に提供



されるといふこと、すなはち生産手段から隔離された労働者が存在するといふことであるが、——實際においては Gewalt (強力) の作用に負ふところが極めて多い。そしてそのことはまた、マルクスが『資本論』第一巻の最後の部分(第七篇第二十四章「謂はゆる本源的蓄積」以下)において、詳細に説明してゐるところである。『資本家的生産の根本條件』たる・労働者の生産手段からの隔離は、「人間の歴史の中へ血と火との消えざる文字をもつて書き込まれてゐる。『資本論』第一巻、カウツキー版六四六頁。』その『現實の歴史においては、征服、抑壓、強盜、簡単にいへば強力 (Gewalt) が、明かに大なる役割を演じる。』(同上、六四五頁。『本源的蓄積の種々なる諸契機は、多かれ少かれ時間的順序において、特にスペイン、ポルトガル、オランダ、フランスおよびイギリスに散在する。イギリスでは、これらは、第十七世紀の末葉、系統的に綜合されて、植民制度、國債制度、近代的租税制度および保護制度を包括するに至つた。これらの方法は、一部分は、例へば植民制度の如く、殘虐極まる強力によつた。しかし(程度の差はあれ)それらの總ては、封建的な生産の仕方から資本家的な生産の仕方への轉形を溫室的に促進せしめ、その過渡を短縮するために、國家權力を・集中的組織的強力を・利用したのである。強力は、新たなる社會を孕んでゐる・あらゆる舊社會の助産婦である。それはそれ自身一の經濟力 (ökonomische Potenz) である。』かゝる關係において、革命的強力は、それ自身一の生産力となる。

以上のことは何を意味するか？ それは先づ、吾々が純經濟過程として觀察する過程(例へば資本

家的社會の成立過程)も、現實的には政治經濟的過程であり、従つて謂はゆる純經濟過程なるものは、現實の過程から政治的權力の作用を捨象したものに外ならぬ、といふことを意味する。更にそれは、國家といへる「一の法律的政治的上層建築」が、その「土臺」たる生産諸關係の變動過程の上に有力な作用を及ぼすといふことを、すなはち國家は社會の「經濟的構造」を土臺として、その上に生ひ立つものであるに拘らず、かくして成立した國家は、逆に土臺そのものを揺り動かす力を有するに至るといふことを、意味するのである。

此の如き強力的作用は、たゞに一の社會形態の成立期にのみ限定されるものではない。例へば、たゞに資本家的社會の成立過程が強力に負ふところ大であるばかりでなく、(資本家的社會の成立過程は同時に他面において封建社會の崩壊過程を伴ふものであるから、前者が強力に負ふといふことは、それ自體がすでに後者における強力的作用を意味してゐるが)、その發展過程すなはち擴大再生産の過程(資本家的生産がたゞび自立するや、それ自身の力で引續き行はれゆく過程)もまた、依然として國家權力の少からざる保護を受けるのであり、更にまたその没落過程に至つても、資本家的社會は「新たなる社會を孕んでゐる古き社會」として、必ずや強力をその「助産婦」とせざるをえぬのである。だから一般的にいへば、國家は社會の「經濟的構造」を土臺として、その上に生ひ立つてゐるものであるに拘らず、かくして成立した國家は、あるひは土臺を築き上げ、あるひは之を確保し、あるひは揺り崩す力を有するに至るものである。此の如くにして土臺と上層建築との間には、有力なる交互作用



が働き合ふものである。

そして強力が此の如く社會の經濟的構造の上に一定の作用を及ぼし、且つその作用が社會の生産諸力の發展を助長するかぎりにおいては、それは『それ自身一の經濟力』であり一の生産力である。(マルクスが『一切の生産要具のうち最大の生産力は革命的階級自體である』と言つてゐるのも、そのためである)。それゆゑにそれは、然るかぎりにおいて、社會の經濟的構造を規定するものとして、經濟過程の觀察に際し吾々の考慮に入れられねばならぬ。『資本論』第一版の序文において、『私の立場は社會の經濟的構造の發展を一の自然史的過程として把握するにある』といへるマルクスが、その第三篇第八章の大部分を、労働時間に關するイギリスの種々の立法の細密なる歴史的叙述のために費し、殊に第七篇第二十四章の全部を、本源的蓄積の詳細なる叙述に充ててゐるのは、(そこでは他の諸篇とは逆に、『純經濟的動因は度外視され』、たゞ資本蓄積の『強力的な槓杆が問題とされ』てゐる)、以上の理由に基づくのである。

私は更に私の謂ふところの政治經濟的諸關係について一言するであらう。

『政治經濟學批判序説』において、政治經濟學の篇別としてマルクスの掲ぐるところは、次ぎの如くである。(河上・宮川共譯本、六五頁。)

『第一に、一般的捨象的諸規定……第二に、市民社會の内面的編制を構成するところの・且

つ基本的諸階級がそれに基づいてゐるところの・諸々の範疇。資本、賃労働、土地所有。……第三に、市民社會の國家形態への包括。それ自體への關係についての考察。「不生産的」階級。租税。國債。公的信用。人口。植民。移住。第四に、生産の國際的關係、國際的分業。國際的交易。輸出輸入。爲替相場。第五に、世界市場と恐慌。』

私がこゝに社會の經濟的構造のうち政治經濟的諸關係に屬すとなすものは、第三『市民社會の國家形態への包括』以下の部分である。『政治經濟學批判』の序言における・より簡單なる表現に従へば、『國家、外國商業、世界市場』の三部門がそれである。私はこのうち特に『國家』について述べよう。言ふまでもなく、こゝで取扱はれる國家(または市民社會の國家形態への包括)なるものは、經濟的構造の上に生ひ立つ上層建築としての國家ではなく、社會の土臺としての經濟的構造の一部を形成するのである。この領域に屬する諸現象は、純經濟的現象ではなくて政治經濟的現象であり、それは國家を捨象(度外視)しては成立しえないといふことをその本質とする。言ひ換へれば、國家の機能がその本質を構成する一契機となつてゐるのである。ところで國家は、社會の經濟的構造(本來の生産諸關係の總和)を土臺として、その上に生ひ立つてゐる『法律的政治的の上層建築』である。だから斯かる上層建築の機能を持つて始めて發生する經濟的諸關係は、『第二次的、第三次的のもの』であり、『一般に、派生的移植的にして本源的ならざる生産諸關係』(『政治經濟學批判序説』、前掲譯本、六七頁)である。そこに純經濟過程の領域に屬するものとして取扱はれたる本源的な生産諸關係との差異



が存する。

「國家」の部門において取扱はれるものとしてマルクスが列擧してゐる項目は、「不生産的階級、租税、國債、公的信用、人口、植民、移住」等であるが、これらのものは現實的には純經濟過程の上に少からざる影響をもつ。私は先きに、マルクスが資本の本源の蓄積の諸契機として、「植民制度、國債制度、近代的租税制度および保護制度」等を指摘してゐることを述べたが、これらの植民、國債、租税等の諸問題は、本來政治經濟過程の領域に屬するものである。純經濟過程の觀察に當つても、それらのものが之に影響を及ぼすかぎり、その影響の側について考察されねばならぬが、しかし「それ自體への關係についての考察」は、政治經濟過程そのものの研究に屬するのである。私はその點を今少し立ち入つて述べよう。

租税制度および保護制度が如何に資本の本源の蓄積を助長したるかの一例として、私は舊著「資本論略解」第一卷第三分冊、一八〇頁以下）のうちに三菱會社助成金に關する故田口博士の論文を引用した。それによると、明治十四年大藏卿歳入出豫算表に現れたる農商務本省の豫算は、次の如くである。

|     |                     |          |                        |
|-----|---------------------|----------|------------------------|
| 傳給  | 七一、五八七 <sup>円</sup> | 三菱會社助成金  | 一、二五〇、〇〇〇 <sup>円</sup> |
| 雜給  | 五〇、三九五              | 沖繩縣航海費   | 九、〇〇〇                  |
|     |                     |          | 二六九、〇〇〇 <sup>円</sup>   |
| 總計  | 一二一、九四二             | 朝鮮國定期航海費 | 一〇、〇〇〇                 |
| 賞賜費 | 一、〇〇〇               | 合計       | 四五八、七七三 <sup>円</sup>   |

すなはち「三菱會社の助成金は農商務本省の定額より大なり、總計四十五萬八千餘圓の内において、三菱會社の助成金に屬するもの二十六萬九千圓なり、故に農商務本省に屬するもの十八萬餘圓にすぎず」。國家權力により強制的に租税として取り立てられたものが、此の如く右から左に、國家の手から資本家の懐に渡される。（國家）とは何であるか？ 階級社會において必然的に發生する「法律的政治の上層建築」は果して如何なる機能をもつものであるか？ 推理の能力ある者に對しては、この簡單なる一例が、既にこれらの問題に對する幾分の答となるであらう。だが此の如きは、純經濟的關係——本源の生産關係——に及ぼす政治の影響にすぎない。

これと異なり、政治經濟的關係そのものは、生産の「土臺」の上に生ひ立つてゐる。従つて生産の領域外に存立してゐる。それゆゑにまた自立の能力なき寄生的、政治的上層建築」が、その活動——その生活過程——のために必要とする物質的資料をば、生産的な土臺から吸収することを、その眼目となすものである。今かゝる營養の吸収のために用ひられる主なる手段は、租税と國債とである。「公的權力を維持するためには、國民の負擔——租税が必要である。これは民族社會には全く知られなかつたものである。しかし……文明の進歩と共にそれもまた不十分となる。國家は將來に對して爲替



を振出し、借入をする、それが國債である』。(エンゲルス「家族・私有財産および國家の起源」西氏譯本、三一一—二頁。)そしてこれらのものが、新たな種類の物質的諸關係を成立せしめることにより、吾々の先きに見た純經濟過程に屬する本源的な生産諸關係の姿を變形せしめることは、言ふまでもない。例へば、純經濟過程においては、剩餘價値の分裂形態として、吾々は利潤、利子、地代、創業者利得等を見るに止まるのであるが、更に進んで政治經濟過程を観察するときには、租税が剩餘價値の分裂形態の一つとして現象することを見るであらう。政治經濟過程そのものの研究は、吾々をかゝる新たな現象形態の理解に導く。

なほ國家は、租税國債等の手段を通して、生産の土臺の上に寄生虫的生活を営むことをもつて満足せず、必然的に支配階級のため自ら生産それ自身を經營するに至る。かゝる場合には、上層建築が謂はゞ自分の足場を自ら作るものであり、従つて上層建築の一部は土臺の一部と合致する。これについては、一九二八年のコミンテルン第六大會において、ブハーリンが次ぎの如く説明してゐる。

『私はすでに綱領委員會において、もしも吾々が無産者獨裁の國家またはブルジョア社會における國家資本主義制を吟味するならば、吾々は、國家は一の上層建築であるに拘らず、それはまた生産過程を制御するといふことを、見出すであらうと述べた。もしも國家にして一の上層建築であるならば、それが生産を制御することに不可能であらうなど言ふのは、問題を非マルクスの提出するといふものである。かゝる議論は次ぎの結論に導く。——國家は上層建築であり生産は土

臺であるから、國家資本主義なるものは不可能であると。だが斯かる議論は明かに誤である。もちろん生産は土臺である。けれども國家なる上層建築が經濟組織と併合されるやうな一の特異な形態がある。かゝる特殊な形態が現に存在してゐる。それは無産者獨裁のもとに存立する。無産者獨裁の特徴は何であるか？ それは、國家組織が直接に社會の土臺へ・生産へ・接合され、その結合内では經濟的諸組織が國家裝置の構成分である、といふ點である。かくて「二次的のもの」(「上層建築」)が「一次的のもの」(土臺)を制御する、それについて何も驚くことはない。かゝる特殊な場合にかぎり、上層建築たるべきものが一部分は土臺の内に割り込み、または土臺の一部が同時に上層建築の構成分を形成するのである。

## 五 社會の階級別とその政治的構造(政治的および法律的上層建築)

社會が階級に分裂してゐなければ、その社會の構成は、従つて吾々の社會的存在の形態は、前節において述べたる經濟的構造で盡きる。だが、社會が階級社會であるかぎり、すなはち社會が搾取する階級と搾取される階級とに、従つて抑壓する階級と抑壓される階級とに、分裂してゐるかぎり、その社會には、前節で述べたる經濟的構造の上に、更にその上層建築としての政治的構造が出来上がる。この政治的構造は、一の階級が他の階級を抑壓するための諸機關から成るところの特別な權力裝置た



ることを、その本質とする。謂はゆる國家なるものがそれである。

この問題につき、最も平易にマルクス主義の見解を述べたものは、レーニンの「國家について」なる講演である。その譯文は『社會問題研究』第九十三冊（昭和四年五月發行）およびその他の雜誌に掲載され、また獨立の小冊子としても刊行されてゐる。こゝにはそのうちの數節を引用しておかう。

「この問題をできるだけ科學的に考察するがためには、國家は如何にして發生し、如何にして發展したかを、少くとも一瞥しなければならぬ。社會科學の問題を正當に考察し、多くの枝葉の問題や驚くべきほど多種多様な反對意見の中にあつて、自己を喪失しないだけの技倆を實際に作り上げるために必要にして且つ最も確實なことは、——この問題を科學的立場から研究するために最も重要なことは、——根本的な歴史的關係を忘却しないことであり、あらゆる問題をば、ある現象は如何にして歴史上發生したか・その現象はその發展において如何なる主要段階を經過してきたか・の見地から觀察し、更にこの發展の見地から、そのものが現在どうなつてゐるかを觀察することである。……この問題において、なかんづく注意を向けねばならぬことは、必ずしも國家が常に存在してゐたわけではない、といふことである。如何なる國家も存在しなかつた時代が嘗てあつたのである。國家なるものは、社會の階級分裂の・搾取者と被搾取者との・現はれる時と處とに、現はれるものである。

「人間による人間の搾取の最初の形態、階級分裂の最初の形態——奴隸所有者と奴隸と——が發生するまで、その時までには、なほ家長制家族なるものが、あるひは往々名づけられるやうに民族的家族

なるものが存在してゐた。（氏とは血族・種族のことであり、ここでは人類が血族・種族の中で生活してゐた）。そしてこの原始時代の痕跡は、多くの原始民族の生活様式のうちに今日も充分明白に残存してゐる。……そしてかゝる時代にこそは、國家なるものは存在せず、體系的な権力行使のための・權力へ人間を服従せしめるための・特殊の装置は決して存在しなかつたのである。しかもまさしく斯かる装置こそ、國家と名づけられるものである。

「人類が小種族のうちで生活し、まだ發展の最低段階に立つてゐた・原始社會においては、すなはちまだ野蠻に近い状態のもとにおいては、現代の文明人とは數千年も隔つた時代においては、——かかる時代においては、國家の存在に對する何等の徴候も見出しえない。吾々はそこに風習の支配を、種族の最年長者が享受した權威、尊敬、權力を、見うける。また吾々はこの權力を屢々婦人が有してゐたことを見うける、——當時における婦人の状態は、抑壓されて何等の權利をも有してゐない現代婦人の状態とは、全く異なつてゐたやうに思はれる。しかしながら、他人を支配するために自己を分離し、統治するに都合の好いやうに、また統治するため體系的に永續的に・或る一定の強制装置すなはち一の（權力）装置——今日では周知の如く、武装せる軍隊の諸組織、監獄、その他、他人の意志を權力に服従せしめるための諸手段がこれであり、それは正に國家の本質を成してゐるものである——を所有してゐるところの人間の特別な範疇は、何處にも見ないのである。

「もし吾々が、謂はゆる宗教的教義や、狡猾なる手管や、哲學的構成や、ブルジョア學者が組み立



てるところの諸種の思想やから眼を轉じて、事物の眞の本質を探究するならば、國家なるものは、畢竟するところ正に人類社會から分離された斯かる統治装置であることを、知るであらう。たゞ統治することのみを仕事とする統治のための強制的特殊装置、他人の意志を権力のもとに服従せしめるための特殊装置——監獄、人間の特殊の組織、《軍隊》等々——を必要とする特殊な人間の一團が現はれるとき、そのとき吾々は國家を有するのである。

「いづれにせよ、まだ何等の國家も存在せず、普遍的關係・社會自體・規律・労働の秩序が、慣習や傳統やによつて、または種族の最年長者あるひは婦人の享受してゐた權威や尊敬やによつて、維持されてをり、特殊の範疇の人間——支配するための専門家——の存在しなかつた時代があつたのである。歴史は示してゐる、人間の特殊の強制手段としての國家なるものは、社會の階級への分裂——すなはち或る集團が他の集團の労働を絶えず占有しうるやうな・一方が他方を搾取しうるやうな・人間の集團への分裂——が現はれた時と處とにのみ、發生したといふことを。……

「もし吾々が、この基礎的分裂の觀點から國家を觀察するならば、吾々は社會の階級への分裂以前には、既に述べたやうに何等の國家も存在しなかつたことを知るであらう。階級への社會的分裂が發生し確立すると同じ程度で、國家も發生し確立する。吾々は人類の歴史において、奴隸制、封建制、および資本制を經過しました現に經過しつゝある數十、數百の國々をもつてゐる。これらの國々の何れにおいても、ものすごく歴史的諸變動が生じたにも拘らず、またすべての政治的葛藤の解決およびす

べての革命が人類の發展と結びついてゐたにも拘らず、奴隸制度から封建制度を越えて、資本主義および資本主義に對する現在の國際的闘争への推移につれて、諸君は常に國家の發展し來つたことを見るであらう。國家は常に自らを社會から隔絶してゐる或る装置であり、それは、支配することのみにあるひは殆んどそれのみに・あるひは主としてそれに・従事してゐる人間の集團から成つてゐる。人類は支配の専門家と支配される者とに分裂する。……この装置、他人を支配するところのこの人間集團は、一定の強制装置・物理的暴力の装置を占有して自己のものとする。人間に對するこの《強制》が、原始時代のやうに棍棒として現はれようと、奴隸制の時代のやうに二層完成した種類の武器として現はれようと、あるひは中世に現はれたやうな火器として現はれようと、それとも最後に、二十世紀における技術的奇蹟がもたらしたところの・全然近世技術の最後の奇蹟に立脚してゐるところの・近代の武器として現はれようと、同じことだ。《壓制》の方法は變化した。しかし國家なるものが發生して以來は、常にあらゆる社會において、統治し命令し支配する人々の一團が存在し、これらの人々は權力の維持のために、物理的強制の一装置、《壓制》の一装置、各時代の技術的狀態に相應した武器の一装置をその掌中に収めてゐたのである。そして吾々が、これらの一般的現象をよく詳細に研究するとき、また吾々が、階級が存在せず搾取者と被搾取者とが存在しなかつた時代には、何故國家が存在しなかつたか、何故國家は階級の發生と共に發生したか、の質問を提出するとき、——そのとき始めて吾々には、國家の本質および意義に關する問題に對し、一定の解答を見出すのである。



てるところの諸種の思想やから眼を轉じて、事物の眞の本質を探究するならば、國家なるものは、畢竟するところ正に人類社會から分離された斯かる統治装置であることを、知るであらう。たゞ統治することのみを仕事とする統治のための強制の特殊装置、他人の意志を權力のもとに服従せしめるための特殊装置——監獄、人間の特殊の組織、《軍隊》等々——を必要とする特殊な人間の一團が現はれるとき、そのとき吾々は國家を有するのである。

『いづれにせよ、まだ何等の國家も存在せず、普遍的關係・社會自體・規律・労働の秩序が、慣習や傳統やによつて、または種族の最年長者あるひは婦人の享受してゐた權威や尊敬やによつて、維持されてをり、特殊の範疇の人間——支配するための専門家——の存在しなかつた時代があつたのである。歴史は示してゐる、人間の特殊の強制手段としての國家なるものは、社會の階級への分裂——すなはち或る集團が他の集團の労働を絶えず占有しうるやうな・一方が他方を搾取しうるやうな・人間の集團への分裂——が現はれた時と處とにのみ、發生したといふことを。……』

『もし吾々が、この基礎的分裂の觀點から國家を觀察するならば、吾々は社會の階級への分裂以前には、既に述べたやうに何等の國家も存在しなかつたことを知るであらう。階級への社會的分裂が發生し確立すると同じ程度で、國家も發生し確立する。吾々は人類の歴史において、奴隸制、封建制、および資本制を経過しました現に經過しつゝある數十、數百の國々をもつてゐる。これらの國々の何れにおいても、ものすごい歴史的諸變動が生じたにも拘らず、またすべての政治的葛藤の解決およびす

べての革命が人類の發展と結びついてゐたにも拘らず、奴隸制度から封建制度を越えて、資本主義および資本主義に對する現在の國際的闘争への推移につれて、諸君は常に國家の發展し來つたことを見るであらう。國家は常に自らを社會から隔絶してゐる或る装置であり、それは、支配することのみにあるひは殆んどそのみに・あるひは主としてそれに・従事してゐる人間の集團から成つてゐる。人類は支配の専門家と支配される者とに分裂する。……この装置、他人を支配するところのこの人間集團は、一定の強制装置・物理的暴力の装置を占有して自己のものとする。人間に對するこの《強制》が、原始時代のやうに棍棒として現はれようと、奴隸制の時代のやうに一層完成した種類の武器として現はれようと、あるひは中世に現はれたやうな火器として現はれようと、それとも最後に、二十世紀における技術的奇蹟がもたらしたところの・全然近世技術の最後の奇蹟に立脚してゐるところの・近代的武器として現はれようと、同じことだ。《壓制》の方法は變化した。しかし國家なるものが發生して以來は、常にあらゆる社會において、統治し命令し支配する人々の一團が存在し、これらの人々は權力の維持のために、物理的強制の一装置、《壓制》の一装置、各時代の技術的狀態に相應した武器の一装置をその掌中に收めてゐたのである。そして吾々が、これらの一般的現象をよく詳細に研究するとき、また吾々が、階級が存在せず搾取者と被搾取者とが存在しなかつた時代には、何故國家が存在しなかつたか、何故國家は階級の發生と共に發生したか、の質問を提出するとき、——そのとき始めて吾々には、國家の本質および意義に關する問題に對し、一定の解答を見出すのである。



「國家は、一の階級が他の階級に對する（支配）を維持するための機關である。社會に何等の階級も存在しなかつた時代、人類が奴隸制に至る以前、原始時代のより平等なる條件のもとに・労働の生産力のなほ全く低度に止まれる條件の下に・労働してゐた時代、原始人類が原始時代の原始的な生存のため必要な手段を難澁して製作してゐた時代、かゝる時代には、指導のために自己を他から分離して總ての他の社會を支配するやうな人間の特種な集團は、發生してゐなかつたし、また發生しえなかつたのである。社會の階級への分裂の第一形態すなはち奴隸制度が現はれた時、農業労働の最も粗野な形態に専心せる人類の一定階級にとつて、或る程度の剰餘を生産する可能性が出來た時、そしてこの剰餘が、奴隸のぎりぎり一杯の生活のために、もはや絶對には必要でなくなつて、それが奴隸所有者の手に歸するに至つた時、かくて奴隸所有者なるこの階級の存在が確立されるに至つた時、——且つ之を確立せんがために、——國家の出現は必然的なものとなつたのである。

「かくして、國家が、——奴隸所有者の國家が、——すなはち奴隸所有者の掌中に總ての奴隸を支配する権力と可能性とを與へるところの裝置が、發生したのである。當時は、社會も國家も現在よりは甚しく小さく、そこに存在した連絡裝置も、現在よりは貧弱であつた。當時にあつては、今日の如き交通手段がまだ存在してゐなかつたからである。そのために、山、河、海は、現在とは比較にならぬほど大なる障礙であつた。従つて國家の形成は、かなり狭い地理的境界の中で行はれた。技術的に貧弱なる國家裝置は、比較的狭い境界と限定された機能とをもつてゐた國家に役立つものであつた。

……國家の形態は異常に雑多なものであつた。……だが、基礎的なことは、奴隸が人間と看做されなかつたこと、たゞに市民として考へられなかつたのみならず、人間としても考へられなかつたことである。ローマ法は奴隸を物と看做した。人身保護のための他の法律については言はずもがな、殺人に關する法律すら奴隸には適用されず、それは専ら、完全な權利を有する市民と認められたところの奴隸所有者のみを保護したものである。君主制が作られても、それは奴隸所有者の君主制であつた。共和制が發生しても、それは奴隸所有者の共和制であつた。その共和制の中にあつては、奴隸所有者は總ての權利を享受してゐるにも拘らず、奴隸は法律に従へば物であつたのである。そのために、ただに奴隸に對する凡ゆる暴行はもちろん、奴隸を殺すことさへも、犯罪とならなかつたほどである。

「搾取形態の交替は、奴隸所有者の國家を封建的國家に轉化した。これは巨大な意義をもつてゐた。奴隸制度の社會にあつては、奴隸の完全なる無權利が一般に行はれ、奴隸は人間としては考へられなかつたのであるが、封建社會にあつては、一般に農民は土地に縛りつけられてゐた。農奴制（隷屬制）の主要特徴は、農民が（そして當時は農民が大多數を占め、都市人口の發展は甚だしく貧弱なものであつた）土地に繋れてゐたことであり、こゝから農奴制あるひは隷屬制なる概念自體も生じたのである。農民は、一定の日數だけ、地主から委託された土地で自らのために働くことをえたのであるが、その他の時は、その地主のために働いたのである。階級支配の本質は依然として存続した。すなはち



社會は階級的搾取の上に立脚してゐたのである。完全なる權利を享有しえたものは、たゞ領主のみであり、農民は無權利なものとなつてゐた。事實において彼等の地位は、奴隸所有者の國家における奴隸のそれと、たゞ僅かばかり違つてゐたにすぎない。尤も農奴は領主の直接の財産と考へられてゐなかつたのであるから、彼等の解放・農民の解放には、常に以前よりも一層廣い道が開けてゐたわけではある。農奴は彼等の時間の一部分を彼等の土地で費すことをえた。すなはちその土地は、謂はゞ或る程度まで彼等自身に屬してゐたのである。そして交換および商業關係の發展の可能性の増大する場合には、農奴制は益々多く崩壊し、農奴解放の範圍は益々多く發展した。封建社會は常に奴隸所有者の社會よりも複雑であつた。その中には商工業の發展の大なる要素が存在したが、それらは當時既に資本主義に導いたものである。中世期には農奴制が重きをなしてゐたが、こゝでもまた國家の形態は多種多様なものであつた。その區別の特徴は、さほど顯著ではなかつたにしても、君主制もあれば共和制もあり、そして支配者と看做されたものは、常にたゞ獨り封建領主のみであつた。農奴は總ての政治權利から絶對に除外されてゐた。

「奴隸制度の下においても、また封建制度の下においても、巨大な多數者に對する僅少な少數者の支配は強制なくして達せられるものではない。全歴史は、隷屬制をゆすぶり動かさんとする被抑壓階級の不斷の企圖で満ちてゐる。奴隸制の歴史は、奴隸制からの解放のための、數百年も續いた闘争で有名である。因に、現在ドイツのコンムニストが採用してゐる「スパルタクス」なる名稱、——眞に

資本主義の桎梏と戦つてゐる。この唯一の大政黨——は、スパルタクスなるものが、大約二千年以前、最も大なる奴隸一揆の一つにおける最も優れた勇士の一人であつたがゆえに、彼等によつて採用されたのである。當時、全然奴隸制に立脚してゐたところの、一見萬能に見えたローマ帝國は、長年月の間自ら武装してスパルタクスの指導下に巨大な一軍隊を形成してゐた奴隸の大（一揆）の打撃によつて震撼せしめられたのであつた。しかし彼等は遂に撃破され、逮捕され、奴隸所有者たちによつて殺戮された。かゝる種類の内亂は、階級社會存在の全歴史を貫いてゐる。吾々は奴隸制時代における斯かる最大の内亂の一例を引用したに過ぎない。封建制度の全時代は、主として不斷の農民一揆に満ちてゐる。例へばドイツにあつては、一つの階級すなはち領主と農民との間のこの闘争は、中世において激烈となり、領主に反對する農民の内亂に變じたのである。諸君はロシアにおいても、封建領主に對する農民の斯かる類似の闘争の例を承知されてゐることと思ふ。

「領主は、その支配の維持、權力の維持のために、老大な人間を彼れの統御の下に總括し、彼等を一定の法律や規則に従はしめるところの、一つの装置を有たねばならなかつた。そしてこれら總ての法律が、畢竟農奴の上に地主の權力を維持することとなつたのである。此の如きが、例へばロシア・または今日もなほ封建制度の行はれてゐる全く時代遅れのアジア諸國・に存在してゐたところの——その形態は共和制であるとか、君主制であるとか、種々異なつてゐるが——封建國家であつたのである。その國家が君主制であれば、一個人の權力が認められ、またそれが共和制であれば、領主社會の



選ばれたものの共働が、多少なりとも許された。——これが封建社會の事態であつた。封建社會は、かくの如き一つの階級分裂をなしてゐて、そこでは社會の壓倒的大多數——農奴——が、土地を所有してゐる。殆んど無に近き極く少數者——領主——に完全に依存してゐたのである。

「商業の發展、商品交換の發展は、一つの新しい階級——資本家——の分離に導いた。中世紀末葉、アメリカの發見後、世界商業が巨大なる發展を遂げ、貴金屬の量が増加し、金銀が交換の對象となり、貨幣の流通が莫大な富を或る一人の手に累積する可能性を與へた時、資本は發生したのである。銀と金とは、全世界において富と認められるやうになつた。領主の經濟的勢力は低下し、一つの新興階級の勢力——資本の勢力が發展した。社會の改造は行はれ、總ての市民は或る程度に平等の地位に置かれ、奴隸所有者と奴隸との以前の分裂は廢止せられ、法律の前には總てのものが平等となり、個人が如何なる資本を有するか——すなはち私有財産として土地を有するか、あるひは無一文で自分の筋力以外には何物をも所有しないものであるか——には全く無關係に、總てのものが法律の前には平等となつたのである。法律は一切の人々を同じ仕方で保護する、それは財産を保護する、かくてそれは、かの財産といふほどのものを所有せず・筋力以外には何物をも所有せず・徐々に貧窮化し困窮してプロレタリアに轉化しつゝあるところの・大衆の側からの、財産に對する攻撃に對して、財産所有者を保護する。これが資本主義社會なのである。……」

以上レーニンの説明せる如く、一定の社會の政治的上層建築は、その社會の經濟的構造の要求によ

つて生まれる。社會の經濟的構造のうちに階級の區別が存せざるかぎり、すなはちそこに搾取し抑壓する階級と搾取され抑壓される階級との區別が存せざるかぎり、そこには社會の一部のものが他の部分のものを抑壓するための政治的裝置は必要でなく、従つてまた存在しえない。もとより如何なる社會においても、人間は彼等の生活資料を生産するために必ず何等かの仕方において共働せざるをえないのであり、従つてそこには勞働に際しての一定の規律秩序が保たなければならず、またそれらの規律秩序を維持するための指導者が存在しなければならぬが、しかしこれらの規律秩序を維持するための指導は、社會の一部のものの利益のために行はれるところの他の部分のものに對する強制的抑壓と異なる。それは、譬へて言ふならば、一隊のオーケストラを構成するためには必ず一人のコンダクター(樂長)を必要とするが、しかしこのコンダクターは他の樂人たちに對する抑壓者でないのと、同じことである。だから社會が階級に分裂してゐないところでは、その社會の人々の間には種々なる生産諸關係が成り立つだけで、強制的抑壓の關係は成り立たない。すなはちその社會は一定の經濟的構造をもつだけで、その經濟的構造から自らを區別するところの・特殊の政治的上層建築なるものは發生しない。ところが一たび社會に階級の區別が發生し、一定の社會が搾取する階級と搾取される階級とに分裂すると、前者が後者を抑壓する必要が生じる。このことは、前者が少數の人々から成り、後者が比較的大多數の人々から成ることのために、特に必要となる。なほ一定の社會に包容する人口數が多くなればなるほど、従つてそれら住民の散布せる地域が廣くなればなるほど、そしてまた、それ



ら被搾取者の反抗が強くなればなるほど、前者が後者を抑壓するための強制的装置はますます擴大されざるをえない。だからマルクスは『資本論』(第三卷、ドイツ本、第二分冊、三二四—五頁。)において、次ぎの如く明言してゐるのである。

「不拂の剩餘労働が直接の生産者たちから絞り取られるところの特殊の經濟的形態は、支配および隷屬の關係を規定する。この關係は直接に生産自體から生へ出るものだが、それはそれで生産の上へ反作用を及ぼす。だが〔かゝる相互作用は存在するが——河上補〕、生産諸關係そのものから生へ出た經濟的共同體の全容姿と、従つてまた同時にその特殊な政治的姿態とは、生産の上にその基礎をもつのである。生産諸條件の所有者が直接の生産者に対する直接の關係——その時々々の形態はおのづから常に労働の様式の・従つてまたその社會的生產力の・一定の發展段階に適應するところの關係——こそは、常に吾々がそのうちに、全社會的構成の・従つてまた支配および隷屬諸關係の政治的形態の・簡單にいへばその時々々の國家形態の・最奥の秘密、隠れたる基礎を發見するところのものである。」

要するに、一定の社會の政治的構造はその經濟的構造の要求によつて生まれ出づるものであり、従つて、たとひ兩者の間には絶えざる交互作用が存在するとしても、結局においては前者は派生的のものであり、後者こそが本源的のものなのである。マルクスが『政治經濟學批判』の序言において、彼れ自身の『政治經濟學的研究の道種に關する簡單な説明』をなすにあたり、「私の研究は、法律關係なら

びに國家形態なるものはそれ自身によつて理解されるべきものでもなく、また謂はゆる人間の精神の一般的發展によつて理解されるべきものでもなく、むしろそれは、物質的の生活諸關係——これが總和は、ヘーゲルが十八世紀における英佛人の先蹤に倣うて、「ブルジョア社會」なる名稱のもとに包括せしところのもの——にその根據を有するものだといふこと、しかもこのブルジョア社會の解剖學的研究は、これを政治經濟學のうちにも求むべきものだといふこと、の結論に達した」と言つてゐるのは、以上の理由からである。

## 六 觀念的上層建築——社會的意識は社會的存在を反映する

吾々は以上をもつて、吾々の社會的存在が如何に構成されてゐるかを述べた。すなはち社會が階級に分裂してゐなければ、吾々の社會的存在は吾々の住む社會の經濟的構造で盡きるのであるが、もし社會が階級に分裂してゐるならば、社會の經濟的構造とそれから派生するところの政治的構造とが吾々の社會的存在を構成することとなる。今本節において考察せんとするところは、かゝる社會的存在と社會的意識との關係である。

すでに第一章唯物論の條下で述べたやうに、意識は一般に存在を反映するといふこと、これが全唯物論の一般的テーゼであるが、今吾々がこの見解をたゞ自然界のみ局限することなく、徹底的にこ



れを社會の上に押しひろげるとき、吾々はそこに、社會的意識は社會的存在の反映であるといふ史的唯物論（唯物史觀）の根本的テーゼを得ることになり、かくて始めて、エンゲルスの言ふ如く、「觀念論（すなはち觀念または意識をもつて存在または物質よりも本源的なものとなす考）」は、その最後の逃げ場たる史觀から追ひ出され、唯物史觀が提供され、そしてこれまでのやうに人間の存在を彼等の意識からでなしに、彼等の意識を彼等の存在から説明する道が発見されたのである。」

社會的意識は社會的存在の反映であるといふ上記の根本的テーゼは、マルクスおよびエンゲルスの著作にあつては、すでに「ドイツ・イデオロギー」のうちに現はれてゐる。（このことから、吾等は、リヤザノフの言ふが如く、「哲學の貧困」および「共産黨宣言」に叙述されてゐるやうな唯物史觀は、おそくとも一八四五年の秋以前に形成されたといふことを、知りうるのである。）「ドイツ・イデオロギー」には、例へば次ぎの如く述べてある。

「天から地に下がってくるドイツ哲學とは全く反對に、吾々は地から天に登る。すなはち吾々は生きた人間に到達するがために、人間が言つたり空想したり觀念したりしてゐることから出發するのではなく、また言はれたり考へられたり空想されたり觀念されたりしてゐる人間から出發するでもない。吾々は現實に活動してゐる人間から出發し、そして彼等の現實的な生活過程から斯かる生活過程の觀念的な反射と反響との發展をも叙述しようとするのである。なほ吾々は、人間の頭脳内における寫像形成をもつて、物質的な・經驗的に確められうる・そして物質的な諸前

提に結びついてゐる・彼等の生活過程の必然的な補足物と見る。かくて道德、宗教、哲學、その他のイデオロギー、およびそれらに適應する意識諸形態は、もはや自立の外觀を保つことができなない。それらのものは何等（獨立）の歴史を有たす。何等（獨立）の發展を有たない、むしろ彼等の物質的生産と物質的交通とを發展せしめる人間が、かゝる彼等の現實と共にまた彼等の思惟と彼等の思惟の産物とを變化せしめるのである。意識が生活を規定するのではなく、却て生活が意識を規定するのである。」（『マルクス・エンゲルス・アルヒーフ』、ドイツ本、第一卷、二三九—二四〇頁。）

右のことが、一八五九年に認められた「政治經濟學批判」の序言中には、

「物質的生活の生産の仕方は、社會的の・政治的の・および精神的の・生活諸過程一般を制約する。人間の意識が彼等の存在を規定するのではなく、却て逆に、彼等の社會的存在が彼等の意識を規定するのである。」

といふ言葉で言ひ現はされてゐるのである。

私は以下、この史的唯物論の根本的テーゼを——社會的意識は社會的存在によつて規定されるといふことを——やゝ詳細に説明するであらう。何故なれば、社會問題の根本的解決に對する吾々の態度——全被壓迫大衆のあらゆる搾取からの解放（かゝる社會的存在の變革）は、決して書齋蟲の單なる道德論など（一の社會的意識）によつて實現されうるものでなく、それは必然的にかくかくの道をとることを不可避的にされてゐる、となす吾々の見解——は、以下説明せんとする史的唯物論の根本的



命題と、不可分離的な連絡を有するものであるから。

社會的存在は社會的意識から獨立に成立し發展するものであること、そして斯くして成立し發展せる社會的存在が吾々の頭腦に反映して始めて吾々の社會的意識を形成するものであること、この問題については、レーニンが極めて明白に次ぎの如く説明してゐる。

「世界經濟の中における個々の各生産者は生産技術の上にこれ／＼の變化をもたらしたことを意識してをり、各々の商品所有者は彼れがこれこれの生産物を他と交換したことを意識してをるが、しかし生産者も、商品所有者も彼等がこれによつて社會的存在を變化することを、意識してゐない。資本主義的世界經濟の内部における斯かる諸變化の一切の總計を、その一切の分岐にわたつて知りつくすことは、マルクスが百人ゐてもなしえなかつたであらう。たか／＼成し遂げられたところのものは、かゝる變動の諸法則が主要な根本的な筋道において發見され、かゝる變動の客觀的論理とその歴史的發展とが啓示されたことである、——こゝに客觀的といふは、意識體たる人間から成り立つてゐる社會が、意識體の存在とは無關係に存在し且つ發展しうるといふ意味においてではなく、社會的存在は人間の社會的意識から獨立してゐるといふ意味においてである。諸君が生活をなし經濟を營み、子を産み生産物を造り、またそれらの生産物を交換するといふ事實から、出來事の一の客觀的に必然的な連鎖、一の發展の連鎖が成り立つのであるが、それは諸

君の社會的意識からは獨立してをり、諸君の社會的意識は決してこれを遺漏なく把握することはできない。』(『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、三三〇—三三一頁。河上譯、レーニン・辯證法的唯物論について、六二—六三頁。)

私はこれまで他の論文においても、すでに幾度かレーニンの以上の言葉を引用した、と記憶してゐる。だが今に至るもなほ、この言葉のうちに含まれてゐる意味の豊富さは、まだ一般的には知られてゐない。吾々は執拗にこれを擁護し宣傳せねばならぬ。

吾々は決して、生産および交換に關する吾々の個人的活動が無意識的に行はれてゐると言ふのではない。例へば私が紡績業の一經營者として、新たに發明された或る機械を、他の同業者に率先して利用することにしたとするならば、その場合私はもちろん無意識的に行動してゐるのではなく、むしろこれによつて労働の生産力はどれだけ増加するか、従つて生産物たる絲の生産費はどれだけ節減されるか、等々、これによつて生ずべき生産技術上の一々の變化を意識してゐるのは無論のこと、これによつて差しあたり私自身の個人經濟の上に生ずべき利益等々をも、またあらかじめ私の意圖内におくのである。だが、私が新たな機械を利用したといふことは、やがて他の同業者を刺激して同じやうなる機械の採用を餘儀なくせしめ、しかるかぎりにおいて絲價の低落を招き、資力の乏しきため同様の機械を利用しえざる小企業者を倒産せしめ、かくて一方においては資本の集中を助長すると同時に、他方においては不變資本(原料機械等に放下された資本)と可變資本(勞賃の支拂に充てられた資本)



との割合に關する社會的平均の上に變化を生ぜしめ、そのことはまた、一方においては労働者の失業數を増加せしめ、社會的全生産物の配分を労働者階級のため益々不利ならしめると同時に、他方においては平均利潤率の漸次的下落の傾向を生み、従つてまた小資本家の没落を早める、等々、それからそれへと『出來事の一の客觀的に必然的な連鎖』を生むに至るのであり、そのことのために、小資本家と大資本家との社會的關係・資本家階級と労働者階級との社會的關係・等々、一言にしていへば、吾々相互の間に結ばれる社會的諸關聯——すなはち吾々の社會的存在——が、徐々に・しかし必然的に・一切の分岐にわたつて變化されることになるのであるが、總てそれらのことに至つては、最初意識的に機械を利用したるものも、差しあたつては、意識せざるところのものであり、意識しえざるころのものである。

以上のことは、誰にとつても極めて理解し易いことであるが、それにも拘らず之に關していつまでも種々なる誤解が残存するのは、社會を構成してゐる個々の個人が意識體たるがためである。これを前に掲げた例について言へば、例へば私が紡績業者として或る新たな機械を採用するとき、私はもちろん無意識に行動するのではない。既に述べたやうに、私はかゝる新たな機械の應用によつて生ずべき生産技術上の一々の變化を意識してゐるのは勿論、これによつて差しあたり私自身の個人經濟の上に生ずべき利益等々をも、またあらかじめ私の意圖内におくのである。かくの如く意識的に活動

するといふことは、人間の特徴である。そして社會はかゝる意識體たる人間から成り立つてゐる點において、地球が無機物から構成されてゐるのとは異なる。だから社會の運動は、地球の運動と異なり、かゝる意識體の意識的活動と無關係に行はれるのではない。このことから人々は、吾々の社會的存在までが吾々の意識的産物であるかに思ひ込むのであり、そのために史觀は『觀念論にとつての最後の逃げ場』となつてゐるのである。

だが、吾々はこれに對して、人間の社會的存在はその社會的意識から獨立してゐるといふのである。吾々の社會的存在はどうなつてゐるか、それが日々どう變化してゆくか、これらのことは、吾々が一意識してゐるところでもなく、また意識されうるものでもない。これが吾々の主張である。

私は先きに生産諸力と生産諸關係との關係を説明した際に、資本主義が今日若々しい『急速な前進をなしつゝある主なる領域は、トルコ及びアフガニスタンである。是等の兩國は、經濟的にも思想的にも、今や極めて急速に封建制から資本制へ推移しつゝある。同様にまた、イギリスの諸領地および南アメリカの若干の國々においても、資本主義に急速に發展しつゝある。かくてこれを世界全體について見れば、一方においては資本主義的經濟の體系一般の上に没落の兆候益々著しく著はれて來てゐるとはいへ、他方において、資本主義的な生産様式は、なほ地理的に擴大され、資本主義的に生産される貨物の分量は、次第に増加しつゝあるのである』と述べておいたが、現在における吾々の社會的存在に關する斯かる鳥瞰圖的な概観ですらも、現に大多數の人々によつて少しも意識されてはゐな



い。況んや『資本主義的世界經濟の内部における諸變化の一切の總計をその一切の分岐にわたつて知りつくすことは、マルクスが百人あつても成しえざるところである。』

アドラトスキの『レーニン主義の理論と實踐』には、この點に關し次ぎの如く述べてある。『思惟は存在に依つて決定される。……吾々は特に、現實の社會關係を、それについて人間が考へてゐるところのもの（すなはち人間の觀念）と混同することなく、眞實あるがまゝに究明しえねばならぬ。この二つの事柄が異なるものだといふことは、吾々が歴史の一步々々に見るやうに、一定の社會關係が成熟し且つ實在してゐても、それに對する意識はなほ缺けてをり、人々は未だ彼等自身がなすところのもの總てを明細に理解してゐないといふことによつても、明白になる。最初に關係が成熟し、然るのち意識が生じ、人々はそれを理解し始める。八十年代のロシアにおいては、資本主義はすでに疑ふべからざる事實であつたにも拘はらず、その頃において、ロシアの資本主義とは無意味なことだと論證した「學者」たちの著述が現はれた。更にまた九十年代においても、ロシアに資本主義ありや否やについての・ナロードニキとマルクス主義者との論争が、續けられてゐたのである。』（前掲書 三頁）

「この一文は既に第一章七四頁に引用しておいた。」

右に擧げられてゐる僅か一二のロシアにおける實例によつて見ても、社會的存在の變化は容易に吾々の意識に上るものでない、といふことが分からう。『思惟は存在によつて決定される。だが、意識がこの決定へ従ふことは、時として極めて緩慢である。』（アドラトスキ、前掲書、四頁。）」

すでに意識が存在の決定に従ふことは極めて緩慢である。言ひ換へれば、意識は必ずしも變化せる現實と併行して變化するものではない。そして此の如き「變化せる現實と同行しえない意識は、「昨日」の現實を反映してゐる」のである。（前掲書同頁に引用せるレーニンの言葉。）」

以上の如き事情から、例へば之を道德感について見れば、現代の社會には三様のものが併存しうるのである。謂はゞ『「昨日」の現實たる封建社會の社會的存在を反映してゐる封建貴族の道德、「昨日」までの現實たるブルジョア社會の發展期における社會的存在を反映してゐるブルジョアジイの道德、「今日」の現實たるブルジョア社會の内部に含まれてゐる未來社會の萌芽を代表してゐる——「現在において現在の變革を・未來を・代表してゐる」——プロレタリアートの道德、これらのものが同時に併存しうる。それについては、エンゲルスが次ぎの如く説明してゐる。』

『如何なる道德が今日吾々に説かれてゐるか？ 第一には、クリスト教的封建的な・以前の信仰時代から傳來された・道德がある。……之と並んで近代的ブルジョアの道德と、更にまたプロレタリア的未來道德とが形成されてゐる。かくてヨーロッパの最も進歩した國々に於ては、過去と現在と未來とが、同時に相並んで妥當するところの道德説を供給してゐるわけである。……さて吾々が、近代社會の三つの階級たる封建的貴族とブルジョアジイとプロレタリアートとが各各其特殊の道德を有つことを知るならば、吾々はこの事實から次ぎの如き結論を抜き出すの外ない、すなはち人間は、意識すると意識せざるとに拘らず、結局においては、彼等の階級的位置が



そのうちに基礎づけられてゐるところの實際上の諸關係から、——彼等がそのうちで生産し交換するところの經濟的諸關係から、——彼等の道德感を形成するものである。』(『反デューリング論』ドイツ本、八八—八九頁。河野・林兩氏譯本、一三八—一三九頁。)

これを要するに、吾々の社會的存在に關する吾々の意識的作用は、いつでも、それがすでに成立してから後の祭である。そのことを、『資本論』第一卷の『商品の物神崇拜的性質とその秘密』と題する有名なる節のうちには、次ぎの如く述べてある。

『人間生活の諸形態に關する思索は、従つてまたそれらの科學的分析は、一般に、現實の發展と反對の道行をする。それは Post festum (後になつて)、そしてそれゆゑに發展過程の出來上がつた諸結果をもつて、始まる。』(カウツキー版、三九頁。)

この一句は、數年前福本和夫氏が力強く引用されてからこのかた、我國のマルクス主義文獻に通ずる人々にとつては周知の句となつてゐるが、少くとも私は今日までこの句の意味を正確には理解してゐなかつたと考へる。(拙著『資本論入門』、合本版、四二二頁参照。)マルクスはこゝで特に Post festum といふラテン語を使つてゐるが、もし私が誤解してゐるのでなかつたら、之は『祭の後』といふ意味であつて、あたかも日本語で『後の祭』といふのと、言葉の感じは同じものなのであらう。かくてマルクスの言ふところは、これを別の言葉で言ひ現はせば、次ぎの如くなるであらう。『人間生活の諸形

態(言ひ換へれば、人間の社會的存在の諸形態)に關する思索は、従つてまたその科學的分析は、いつでも後の祭であり、すでに發展の結果として一定の形態が出來上がつてしまつた後に、それについて始めて行はれるものである。』考へて見ると、これは當然のことでもある。何故なれば、社會的意識は社會的存在の反映に外ならぬのであるから、社會的存在の一定の形態が先づ出來上がつてしまはねば、それについての一定の意識が確立され、それに関する思索が行はれ始めるといふことは、ありえないからである。

これによつて見れば、人間の歴史を『社會的意識すなはち種々なる哲學的の・宗教的の・政治的の學說および見解』から説明しようとする事が、如何に本末顛倒であるかゞ分からう。社會的存在に關する思索——かゝる觀念的なもの——は、すべての事後に行はれる『後の祭』である。それはそれに先だつて行はれた本當の祭を反映してゐるにすぎない。反映してゐるものから反映されてゐるものが説明さるべきではなく、逆に反映されてゐるものから、その反映が説明されねばならぬ。譬へば、私の寫眞から私が生まれるのではなく、たゞ私の現實的な存在が寫眞に映されたにすぎないのだから、そこに寫つてゐる姿が何故これこれの形をしてゐるかは、實物の私がかくかくの姿をしてゐるといふことからのみ、説明されねばならぬ。マルクスが『政治經濟學批判』の序言における有名なる唯物史觀の公式において、『社會の變革を觀察するにあつては、吾々は常に、經濟上の生産諸條件のうち、起れる物質的の・自然科學的に忠實に確證されうる・變革(すなはち社會的存在の變革)と、人間が



そのうちで斯かる衝突（生産諸力と生産諸關係との衝突）を意識せしめられ且つこれを克服するに至るところの、法律的の・政治的の・宗教的の・藝術的の・ないし哲學的の・簡單にいへば觀念的の・諸形態（即ち社會的意識の諸形態）とを、區別しなければならぬ」と言ひ、且つ「かゝる變革時代をばその時代の意識から判断することは、たゞに不可能であるばかりでなく、むしろこの意識なるものが、物質的生活（すなはち社會的存在）の矛盾から、社會的生產諸力と生産諸關係との間に現存する衝突から、説明されねばならぬのである」と言つてゐるのは、そのためである。

吾々はすでに第一章の一、「觀念論と唯物論」と題する條下において、思惟（または意識）の存在に對する關係、これが全哲學の最高の問題であり、この問題が如何に答へられるかに従つて、全哲學は存在に對する意識の本性性を主張する觀念論と、意識に對する存在の本性性を主張する唯物論との、二大陣營に分裂することを述べた。今社會の觀察にあたつても、これと同じやうなる二つの對立的意見が存在しうるのである。すなはち社會的意識をもつて本源的なものとなし、社會的存在をかゝる意識から派生したなものとなす一切の見解は、精神的史觀に屬するのであり、これに反し、社會的存在を本源的なものとなし、社會的意識はかゝる存在によつて規定されるものに外ならずとなす一切の見解は、唯物史觀（史的唯物論）に屬するのである。歴史または社會に對する見解（史觀または社會觀）の根本的な對立は、實にこゝに存在するのである。そして唯物史觀は、すでに社會的意識をもつて社會的存在の反映であるとなすがゆゑに、社會または歴史の觀察にあたつては、何よりも先づ人間の社會的

存在——人間の物質的な社會的生活、社會の經濟的構造——の科學的分析をその基礎となさざるをえない。唯物史觀（または史的唯物論）と經濟學との間における密接なる連絡は、かくして生じるのである。

## 七 社會變革の總過程——階級闘争——經濟と權 力——必然の王國から自由の王國への跳躍

以上吾々は、第四節において、生産諸關係の總和たる社會の經濟的構造の構成分を分析し、次に第五節において、かゝる經濟的構造の上に生ひ立てる政治的上層建築について説明し、最後に第六節において、かゝる社會的存在の反映としての觀念的上層建築について説明した。これによつて見れば、社會を構成せる諸々の要素のうちその經濟的構造が一切のものの本源的な土臺であることが分かる。ところで、既に第三節において説明したやうに、生産諸關係の總和たる社會の經濟的構造の變革を必然的ならしめるところのものは社會的生產諸力の發展である。かくて吾々の到達するところの結論は、結局において、社會的生產諸力の發展が社會進化の根本動力であるといふことである。すなはち社會的生產諸力とその發展の一定の段階に達するときは、從來の生産諸關係は嘗ては生産諸力の發展に役立ちしものが、逆にその發展に對する桎梏となる。かくして社會の經濟的構造は、——社會的生產諸力のより以上の發展を前提とするかぎり、すなはち社會全體がその没落の過程を辿るにあらざ



るかぎり、——變革されざるをえないのであるが、しかも既に社會の經濟的構造が變革されるならば、それは社會を構成せる一切の諸要素に對する本源的な土臺をなすものであるから、それにつれて政治的上層建築も、觀念的上層建築も、あるひは急激に・あるひは徐々に・變革されざるをえない。かくして人間の歴史の全過程は、——社會的の・政治的の・および精神的の・生活諸過程一般は、——結局において、生産諸力と生産諸關係との辯證法的關係に基づく『自己運動』の過程として把握される。吾々は先きに（特に第二章の五、その三、参照）、人間社會の進行を自己運動において・自發的發展において・把握することが歴史を根本的に理解するための條件である、といふことを述べた。だが、このことを誤解して、人間の歴史が人間の活動を待つことなしに自働機械のやうに進むものと考へてはならぬ。それについては、デボーリンが、『革命的辯證家としてのレーニン』なる論文のうちに、次の如く述べてゐる。

「形而上學的な考方をする頭の人々は、——如何によくマルクスを研究したにしろ、彼れの學說の精神たる革命的辯證法を把握しない人々は、——資本主義から社會主義への推移について、先づ資本主義そのものが遺漏なく「疲れ果て」なければならず、さうなつたならば社會主義の推移はひとりで行はれるものだ、といふやうに考へてゐる。資本主義から社會主義への推移または發展（總じての社會形態から他の社會形態への推移または發展——河上補）に關する此の如き考は、マルクス主義と何等共通のものを有たぬ。マルクスが、社會形態の轉化の客觀的過程を研究すべき社會科學の基礎と

なしたる・社會組織（社會の經濟的構造——河上補）の變革に關する包括的な思想は、かゝる形而上學的な取扱ひにより、根本から傷けられてしまふ。マルクスおよびエンゲルスの學說は、彼等が繰り返し説明してゐたやうに、「吾々の學說は決してドグマではなく、むしろ行動への案内である」といふことを、その本質とする。……

「マルクス主義的に理解されたる變革の觀念のうちには、それが歴史的過程について・社會的發展について・語られるかぎり、決定的な要因としての人間の活動すなはち階級闘争を含む。人間の歴史は人間によつて造られる。畢竟マルクスの學說の最奥の意義は、窮極において經濟的諸範疇を人間の社會的な諸關係に還元することに存する。それゆゑ社會的發展に關する「自働」觀は、決してマルクス主義と調和されうるものではない。現代社會における生産諸力の發展は、社會諸階級の間における對立を明白にし且つ尖鋭ならしめ、それらの諸階級を驅つて斯かる對立を慘憺たる階級闘争・革命・および内亂によつて解決することを餘儀なくせしめる。これによつて見れば、マルクス主義は、その全本質において、あらゆる自働説、宿命説、等々と正に相容れざるものである。自働的な且つ宿命的な過程としての事態の自然的發展に立脚する人々は、徹頭徹尾の形而上學論者であり、一切の辯證法に無縁である。」（河上譯『レーニンの辯證法』、二五—二七頁。）

右に述べてある通り、マルクス主義的に理解されたる社會變革の觀念のうちには、いつでもその決定的要因としての人間の活動すなはち階級闘争が含まれてゐるのである。吾々は先きに（本章第三節



参照) 社會の變革を生産諸力と生産諸關係との間における矛盾衝突によつて説明したのであるが、社會的機構の内部に存する斯かる矛盾衝突は、社會の表面における現象形態としては、一の階級と他の階級との間における矛盾衝突——すなはち階級闘争——となつて現はれるのである。

かゝる闘争において、現存せる生産諸關係の維持を代表する立場に立つものは、かゝる生産諸關係のもとにおいて有利な地位に立つところの階級すなはち支配階級または搾取階級であり、生産諸力のより以上の發展を・従つてまた現存せる生産諸關係の打破を・代表する立場に立つものは、かゝる生産諸關係のもとにおいて困厄の淵に陥れられつゝある被抑壓階級または被搾取階級である。簡単にいへば、支配階級は生産諸關係を代表し、被抑壓階級は生産諸力を代表する。かくて例へば、現代の社會においては、『社會的生産と資本家的占有との間の矛盾(すなはち社會的生産諸力と資本家的生産諸關係との間の矛盾——河上補)』は、プロレタリアートとブルジョアジーとの對立となつて明白に現はれてゐるのである。(エンゲルス『反デュリッング論』、ドイツ本、二九一頁。河野・林兩氏譯本、四六七頁。)

生産諸力のより以上の發展に對する桎梏を打破せんとする立場にある階級は、しかるかぎりにおいて全社會の利益を代表する。エンゲルスはいふ、十八世紀においては、『封建貴族とブルジョアジーとの對立と相並んで搾取者と被搾取者との・富裕なる情け者と勞働しつゝある貧者との・一般的な對立が存した。ブルジョアジーの代表者をして、自分を特別な階級の代表者と考へしめずして、却て苦惱しつゝある全人類の代表者と考へしめたのは、正しくかゝる事情であつた。』(同上、ドイツ本、二頁。)

譯本、三頁。) これと同じ事情が現在においても存する。すなはち現代のプロレタリアートは、自らを解放するために全被壓迫民衆を解放すべき立場に立つことにおいて、正に『苦惱しつゝある全人類の代表者』たる立場に立つてゐるのである。

以上述ぶるが如く、生産諸力と生産諸關係との間における衝突は、社會の表面においては一の階級と他の階級との間における闘争となつて現はれる。だからまた、生産諸力と生産諸關係との衝突に基づく舊社會の没落と新社會の誕生とは、當然に階級闘争の産物である。そしてその際、階級闘争は必然的に政治的闘争となつて現はれる。マルクスが『哲學の貧困』の結語において、『社會運動は政治運動を排斥するものと云ふこと勿れ、それが同時に政治運動にあらざるが如き社會運動なるものは、斷じて存在しない。もはや階級も階級對立も存在せざるが如き状態のもとにおいてのみ、始めて社會進化は政治革命たることをやめるに至るであらう』と言つてゐるのは、そのためである。

しからば何故『階級對階級の闘争は一の政治的闘争である』か? この問題については、私は嘗て『經濟と權力』と題する論文において、やゝ詳細にこれを取扱つたがゆゑに、こゝには省略しておく。(右の論文は、本年發行の拙著『マルクス主義のために』と題する論文集および『マルクス主義批判者の批判』と題する論文集の双方に、収録しておいた。)

要するに、人間の歴史を生産諸力と生産諸關係との闘争過程として把握するといふことは、これを



階級對立の社會に當てはめて言へば畢竟するにこれを階級闘争の歴史として把握するといふに等しい、マルクスおよびエンゲルスの共著になれる『共産黨宣言』第一節の冒頭に、「すべて從來の歴史は階級闘争の歴史である」と書き出してあるのは、そのためである。用語が異なるために、そこに別種の見解が展開されてあると思つてはならない。

さて吾々は以上節を重ねて唯物史觀の何物たるやを説明し來つたが、此の如きがエンゲルスの言葉によれば、マルクスの偉大なる二つの発見の一つに屬するのである。

ところで、すでに唯物史觀が提供されたといふことは、人間の歴史の必然的な動きが始めて科學的に理解されたといふことであり、そしてそのことは同時に、人間が盲目的に歴史の自己運動のなかに巻き込まれることを已め、意識的に自分自身の歴史を（言ひ換へれば、意識的に自分自身の社會的存在を）形成しゆく可能性を具ふるに至つたといふことを、意味するのである。かくて人間の歴史は、かゝる認識の確立と共に、その本質を一變せねばならぬ。何故なれば、必然の認識によつて人はこゝに新たなる自由を得るから。私は最後にそのことを一言してこの節を終らう。

古代共産制、奴隸制、農奴、制および現存の資本家的制度等、これまでの社會形態はみな無意識的に形成されたものであり、かゝる社會形態のもとに描かれ來つた今日までの歴史は、社會的統制から逸脱してゐる生産諸力の絶えざる發展のために、それらの生産諸力と生産諸關係との間に必然的に生

じる矛盾が、一の「自己運動」として盲目的に繼起せしめた自然史的過程の連鎖に外ならぬ。それはまことにマルクスのいふ如く「人類社會の前史」(die Vorgeschichte der menschlichen Gesellschaft)たるにすぎない。しかるに今やこの前史は次第にその最後の頁に近づきつゝある。それはすでに「社會的生產過程の最後の敵對的形態」たる資本主義にまで發展し、そしてその資本主義は更にその最後の階段たる帝國主義の時代にまで押し進んでをり、そのために、この資本主義の體系内に含まれる矛盾は、今まさに未曾有の激化を呈してゐる。「しかし資本家的社會の胎内で發展した生産諸力は、それがこの社會内における階級的敵對を激化せしめる主要動因であるにも拘はらず」、この敵對の「個々人の社會的生活諸條件から生ずる敵對的關係の、窮極的な徹底的な」解決のための物質的諸條件を造り出した。『今や生産手段を社會の共同管理のもとに移し、社會的生產を計畫的に統制し、生産諸力と生産諸關係とを意識的に調整しゆくことが、必要となりまた可能となつた。しかも生産手段を社會の共同管理のもとに移せば、他人を搾取する階級は存在しえなくなり、従つて他人により搾取される階級も存在しなくなり、階級と階級との敵對一般が廢除される。なほ生産諸力と生産諸關係とが意識的に調和されることになれば、兩者の矛盾撞着によつて惹き起される「自己運動」としての自然史的過程もまた止揚される。一言にして蔽へば、すべて從來の歴史においてその動力となつてゐた生産諸力と生産諸關係との間における矛盾、その人的表現としての支配階級と被抑壓階級との間における闘争、これらのものがみなその跡を絶つ。かくて人類社會の前史は、資本家的社會形態をもつて、



その終りを告げる。『吾々は今、人類の眞の歴史——前史に對していへば本史——の第一頁がまさに描き初められんとする。その前夜に際會してゐるのである。そして唯物史觀なるものは、人類の歴史における斯かる未曾有の飛躍轉換の時機にあたり、人類がそれ自身の社會的存在の變革過程に對して有するに至りし自覺の產物として、かゝる飛躍轉換を實現すべき歴史的任務を負へる階級——『あれやこれやの或る特殊なる階級組織の廢止またはあれやこれやの或る特殊なる階級の特權の廢止ではなく、實に階級一般を廢止せんとするの要求を、歴史上はじめて提起しうる一階級、さうだ、この要求を實現しなければ支那の苦力の境遇に没落するの外なき状態のもとにおかれた一階級』——のために提供された『偉大なる認識の武器』である。

これによつて必然の法則が——從來吾々の生活を拘束し支配し來れる盲目的な自然法則が——認識される。そしてこの認識により、吾々は始めて、吾々自身の生産物によつて支配されることから免れうるの可能性を得る。『自由は、自然法則からの夢想的な獨立のうち横たはるのでなく、この法則の認識のうち・且つその認識によつて與へられたところの、その法則を計畫的に一定の目的のため働かしめることの可能性のうち・横たはるものである。』（エンゲルス『反デュリング論』、ドイツ本、一二頁。）『社會的に作用する諸々の力は吾々がこれを認識せず、またこれを考慮に入れざるかぎり、自然の諸力と同じやうに、盲目的に・無理やりに・破壊的に・作用する。だが吾々が一たびこれを認識し、その活動・その方向・その作用・を把握するならば、それを益々吾々の意思に従はしめ且つ之・

によつて吾々の目的を達することは、全く吾々の勝手になる。このことは特に今日の強大なる生産諸力にあてはまる。吾々がこの生産諸力の性質と特性とを理解することを執拗に拒んでゐるかぎり、——資本家的な生産の仕方とその辯護者たちは斯かる理解を受けつけないのであるが、——しかるかぎりにおいて、これらの生産諸力は、吾々に係はりなく、吾々に反抗して作用し吾々を支配する。だが一たびその性質が理解されたなら、それは協同せる生産者たちの掌中において、惡魔的な支配者から温順な從僕に轉化される。それは恰も、暴風雨に際しての落雷中の電氣の破壊力と・電信機や電弧やの手馴づけられた電氣・との差異の如きものであり、また火事を起してゐる火と・人間の役に立つてゐる火と・の相違の如きものである。遂に認識されるに至つたその性質に従つて今日の生産諸力を取扱ふことにより、社會的生產の無政府状態の代りに、全體ならびに各個人の必要に應じてなされる社會的な計畫的な生産の規律が行はれることになる。』かくて資本主義的生產は社會主義的生產にその席を譲り、吾々の社會的存在の形態はこゝに一大變革を閱するに至るのである。『資本家的な生産の仕方、人口中の大多數のものを益々多くプロレタリアに轉化することにより、かゝる變革を死を賭して完成せざるをえない力を作り出す。』（以上、『反デュリング論』、ドイツ本、三〇〇—三〇一頁。）このプロレタリア階級こそは、遂に一切の數词的囁語に迷はされることなく、『彼等の頭のなかに抵抗しがたき必然性をもつて、多かれ少かれ明かな姿で迫りくる明白な物的事實』のために、乗りかゝつたこの舟を——この舟全體を——没落の難所から救ひいだす唯一の可能な道を發見する。辯證法的唯物論——



—唯物史観は、プロレタリアートが斯かる道程を進軍するに際しあるときは突貫し、あるときは廻り路をなし、あるときは後に戻り、最初の出發點から別の方向へ出直す等々、あらゆる複雑な戦術をとることを餘儀なくされつゝ、しかも最も確實に且つ最も迅速に最後の目標に到達せんための『行動の指導原理』となるものである。

ところで斯かる目標が遂に實現されえたらば、吾々は、物質的生活の社會的生産の領域において、可能なかぎりの自由を獲得する。もちろんマルクスの言へる如く、眞の意味における『自由の王國は、必要および外的目的性によつて規定されてゐる労働が廢止されるところで、事實上はじめて始まる。それは事物の性質上、本來の物質的生産の領域のかなたに横たはる。野蠻人が彼れの慾望を満足するために、彼れの生活を維持し再生産するために、自然と闘はねばならぬと同じやうに、文明人もまた同じことをせねばならず、且つ彼れはそれを如何なる社會形態のもとでも、またあらゆる可能な生産の仕方のもとでも、さうせねばならぬのである。この領域〔物質的生活の領域〕における自由は、社會化されたる人類——協同せる生産者たちが自然と彼等との物質交換において一の盲目的な力により支配されることの代りに、これを合理的に統制し、彼等の共同管理のもとに持ちきたし、それをば最小の勞費をもつて、且つ彼等の人間的性質に最もふさはしく最も適當な諸條件のもとで、成就しうることのうちにのみ、存立しうる。しかしそれが依然として必然の領域たることに變りはない。この必然の領域のかなたに、自己目的として値する人間的な力の發展、眞の自由の王國は始まる。だがそれ

は、その土臺としての必然の領域の上のみ開花しうる。』（『資本論』、第三卷、ドイツ本、第二分冊、三五五頁。）だが、かゝる眞の自由の王國のかなたなる謂はゆる必然の領域においても、將に來らんとする社會においては、吾々と自然との間に行はれる物質交換（社會的生産）が、『合理的に統制』され、吾々の『共同管理のもとに持ちきたされ』、それは『一の盲目的な力として吾々を支配することを已める』のであるから、その意味において、吾々は『必然』を『自由』に轉化するのである。エンゲルスの言葉によれば、『こゝに始めて人間は、ある意味において、決定的に動物界から訣れ、動物的生存條件から脱して眞に人間的なる生存條件に入る。……今までは歴史を支配してゐたところの客觀的にして外部的なる諸々の力は、今や人間自身の統制のもとに服する。この時よりして始めて、人間は完全なる意識をもつて彼等の歴史を自ら作るであらう。……これ必然の王國から自由の王國への人類の跳躍である。』（『反デューリング論』、ドイツ本、三〇五—三〇六頁。こゝの引用文は、河野・林兩氏の譯文による。）

かくて人類の歴史は全くその本質を一變する。唯物史観は、將來における歴史の斯かる跳躍的變化を自ら意識してゐるのであり、その點において、現在吾々の有するが如き形態における唯物史観は、將來の歴史にのみ妥當するものとして、——すなはちそのまゝの形態では將來の歴史に妥當しえざるものとして、——それ自身の限界を自覺してゐるものである。生産諸力と生産諸關係との矛盾、この矛盾より生れる『自己運動』としての盲目的な歴史——その經濟的基礎には階級の對立に基づく一の階級の他の階級に對する搾取關係を含み、その政治的上層建築としては一の階級が他の階級を（搾取）



するための（暴力）装置たる（國家）を有する社會の歴史——は、プロレタリア（革命）の完成と共にその終りを告げる。かくてプロレタリア（革命）のための認識の武器は、その（革命）の（成就）の後に再び新たな鑄型によつて鍛錬し直ほされるであらう。まことに辯證法の前には、永遠的なものは何一つとして存在しえないのである。

## 八 唯物史觀の公式の略解

マルクスの『政治經濟學批判』の序言中には、唯物史觀の要領を定式化した一節がある。從來私が唯物史觀の公式といつて來たものがそれである。私は次にその全文を掲げ、これに簡單なる註釋を加へて、この第三章を終結するであらう。（以下字を落して引用符中に入れたるものがマルクスの文章である。）

『人間は、彼等の生活（または生——河上補）の社會的生產において、一定の・必然的の・彼等の意志より獨立せる・諸關係を、すなはち彼等の物質的生產諸力の一定の發展段階に適應するところの生産諸關係を、與へられたものとして受けとる。これら生産諸關係の總體は、その社會的經濟的構造を、すなはち法制上および政治上の上層建築がその上に生ひ立ち・一定の社會的意識諸形態がそれに適應するところの・現實の土臺を、形成する。』

以上は、社會の構成を靜的なものとして分析したもの。そこに現はれてゐる生産諸力、生産諸關係、

等々用語については、すでに前節において説明したところである。

『物理的生活の生産の仕方は、社會的の・政治的の・および精神的の・生活諸過程一般を制約する。』

以上は、社會生活を動的な過程として觀察したもの、生産の仕方といふ言葉の意味は、やはり前節において説明したところである。

『人間の意識が彼等の存在を規定するのではなく、むしろ逆に、人間の社會的存在が彼等の意識を規定する。』

以上は、社會的存在と社會的意識との關係についての・唯物史觀の根本的テーゼである。この見地からして、社會的存在の觀察こそが先づ吾々にとつての基礎的な仕事でなければならぬといふ方針が立つ。以下掲げるところは、人間の社會的存在の進化に關する辯證法的な把握の仕方の精髓である。そこでは言ふまでもなく生産諸力と生産諸關係との間における矛盾撞着が問題の中心である。

『社會の物質的生產諸力は、その發展のある一定の段階において、從來それがそのうちに運動してゐたところの現存の生産諸關係と・あるひはたゞその法的表現にすぎざる所有諸關係と・衝突する。これらの諸關係は生産諸力の發展形態からその桎梏に轉化する。こゝにおいてか社會革命の時代が到來する。經濟的基礎の變動につれて、巨大なる上層建築の總ては、あるひは徐々に・あるひは急速に・變革する。』



以上は、一定の生産諸關係が、社會の物質的生產諸力の發展のために、その發展形態から逆にその桎梏に轉化し、かくて社會の經濟的構造の變革が不可避的となることを示す。こゝに生産諸關係を言ひ換へて所有諸關係としてあるのは生産手段に關する所有の有無が階級社會における基本的な生産諸關係を決定するからである。

「かゝる變革を觀察するにあつては、吾々は常に、經濟上の生産諸條件のうち起れる物質的の・自然科學的に忠實に確證されうる・變革と、人間がそのうちで斯かる衝突を意識せしめられ且つこれを克服するに至るところの、法律的の・政治的の・宗教的の・藝術的の・あるひは哲學的の・簡單に云へば觀念的の・諸形態とを區別しなければならぬ。かゝる變革時代をばその時代の意識から判斷することは、恰も或る個人が自分自身のことを何う考へてゐるかによつて其の人を判斷せんとするのと同じで、たゞに不可能であるばかりでなく、むしろこの意識なるものが、物質的生活の矛盾から・社會的生產諸力と生産諸關係との間に現存する衝突から・説明されねばならぬのである。」

以上の見解は、社會的意識をもつて社會的存在の反映となす見地からは當然の主張であるが、しかもこのことが從來の唯物論者には理解されなかつたのである。

「一の社會形態は、その形態がそれらのものにとつて充分な廣さであるところの・すべての生産諸力が發展してからでなくては、決して没落せず、また新たなより高度の・生産諸關係は、その物質

的な存在諸條件が舊社會自體の母胎内で孵化しうるまでは、決して從來のものに取つて代りはしない。だから人間は常に自から解決しうる問題をのみ問題とする。なぜといふに、よく正確にこれを觀察するならば、問題それ自體は常に、その解決の物理的諸條件がすでに存在してゐるか・あるひは少くとも其の生成の過程にあるか・の場合にのみ、始めて發生するものだから。」

社會はそれ自身のうちに含んでゐる矛盾の激化のために動く。しかも社會を構成してゐるものは人間であり、その人間によつて歴史は造られてゆくのである。だから社會的矛盾のために生ずる問題は、——その矛盾が運動の母であるがゆゑに、——常に人間にとつて解決されうる問題なのである。なほ一の社會形態が生産諸力にとつて『充分な廣さである』といふ言葉の意味は、特に前節において説明したところである。

「極く大づかみには、アジア的の・古代的の・封建的の・近代ブルジョア的の・生産の仕方が、經濟的社會形態の進歩し來つた段階的時期として目ざされうる。」

吾々は今日かゝる段階的時期を、(一)古代共產制の時代、(二)奴隸制の時代、(三)農奴制または封建制の時代、(四)賃労働者制または資本家制の時代の四つに分かつ。古代共產制にあつては階級別がまだ存在してゐないが、奴隸制以下の諸社會はすべて階級に分裂した社會である。すなはち奴隸制の社會にあつては、奴隸の所有者が奴隸の剩餘労働を搾取する階級であり、封建制の社會にあつては、封建領主が農奴の剩餘労働を搾取する階級であり、今日の資本主義的社會にあつては、資本家が賃勞



働者の剩餘勞働を搾取する階級である。これらの諸社會は、いづれも階級社會であるかぎり、そこには一様に搾取する階級と搾取される階級との對立が存在する。たゞその搾取の様式を異にするがために、各々別種の社會形態を形成するのである。

『ブルジョアの生産諸關係は、社會的生產過程の最後の敵對的形態である。こゝに敵對的といふは、個人的敵對の意味ではなくて、諸個人の社會的生存條件から生じる敵對の意味であるが、しかしブルジョア社會の母胎内に發展しつゝある生産諸力は、同時にこの敵對の解決のための物質的諸條件を作る。されば人類社會の前史は、この社會形態をもつて終りを告げる。』

以上の章句が意味するところは、すでに本章第七節の最後において詳述したところである。

## マルクス主義の哲學的基礎 終り

### マルクス主義の哲學的基礎

價二一〇圓

著者 河上肇

發行人 小森武

東京都千代田區神田錦町三ノ一八

印刷人 中川二郎

東京都港區芝南佐久間町一ノ七

發行所 株式會社 黄土社

東京都千代田區神田錦町三ノ一八

出協會員番號 A 二一五〇〇一

昭和24年1月15日印刷  
昭和24年1月20日發行





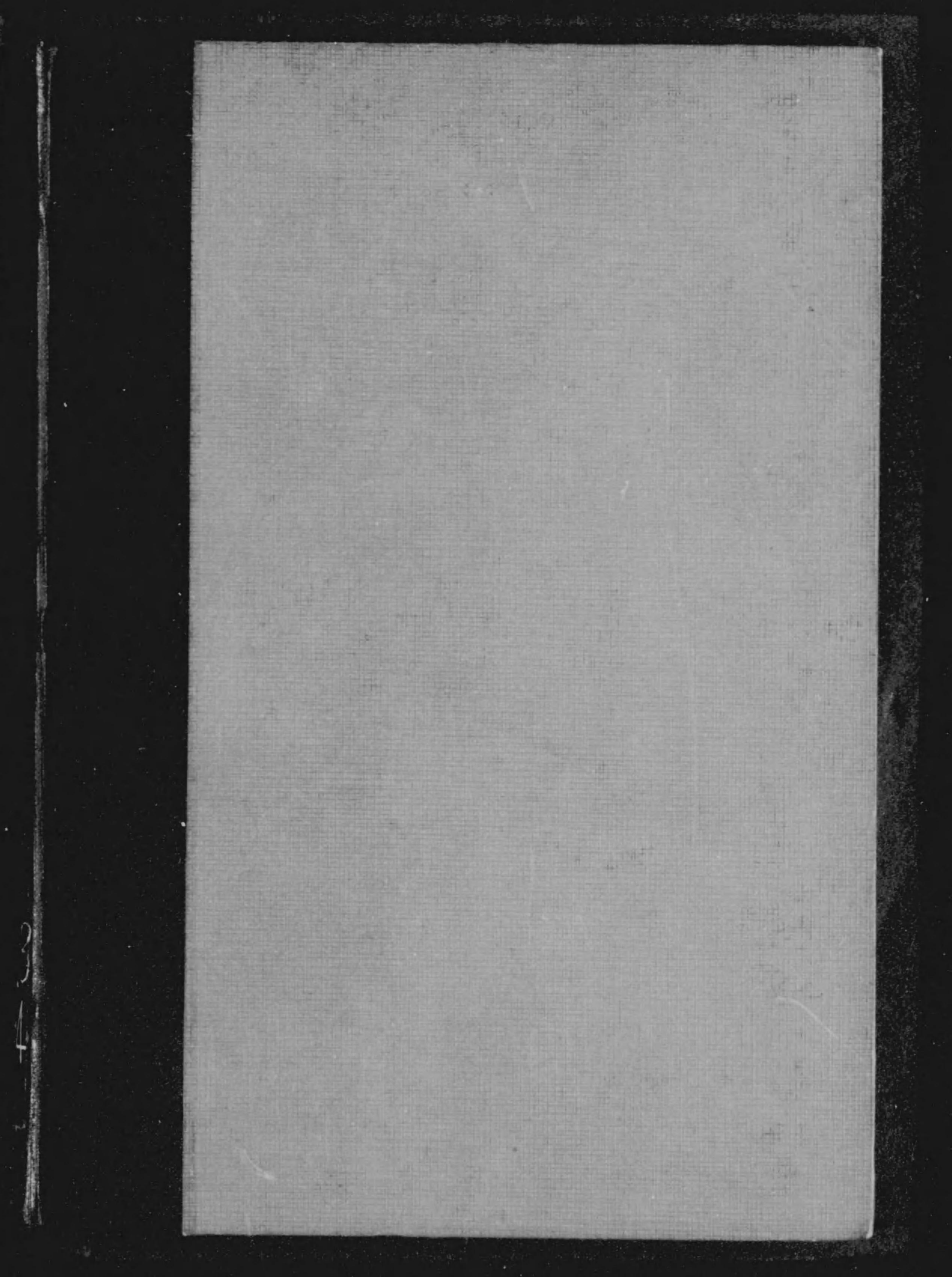


363.3

KA94

2





3  
4